

仙台市文化財調査報告書第9集

仙台市根岸町

# 宗禪寺横穴群発掘調査報告書

昭和51年3月

仙台市教育委員会  
仙台市建設局道路部

仙台市文化財調査報告書第9集

仙台市根岸町

# 宗禪寺横穴群発掘調査報告書

昭和51年3月

仙台市教育委員会  
仙台市建設局道路部

## 序

社の都仙台は、学都として、また、東北文化の中心地である、との誇りを仙台市民は抱いています。そして、それにふさわしい数多くの豊かな文化的遺産や伝統が我が郷土仙台にはあります。仙台人は、そうした豊かな環境の中で育くまれているのです。

ところで、仙台の歴史といえば、何といっても、藩祖伊達政宗公以後の歴史資料が豊富な点に比較して、それ以前の資料に乏しい面がありました。これはとくに、古代、中世における文書資料が稀少であることとあわせて、地下に眠る埋蔵文化財の調査が少なかったことにもよるとと思われます。

こうした意味では、このたびの宗禅寺横穴群の発掘調査によって、14基の多種多様な横穴墓と出土品等が発見されたことは、とくに、市街地中心部に立地する数少ない埋蔵文化財の調査例として、貴重なものと考えます。

調査の現地公開などに参集した市民は延千人近くにもおよび、身近に眠る文化財の発見に対する驚きと関心の深さがあらわれたように思います。

ただ、今回の調査は、都市計画道路築造と墓地用地造成を前提とした調査であったため、調査後、発見された横穴のほとんどはそのまま埋め戻され、道路および墓地の下に半永久的に埋没することになってしまい、この横穴に関しては、本報告書の記録によってのみ伺うだけとなりました。

その点、この報告書が文化を愛し、郷土を愛する多くの方々によって利用され、郷土文化の向上に少しでも資するよう願ってやまない次第であります。

末尾ながら酷寒の候、調査を担当された伊東信雄先生をはじめ、調査の遂行に御尽力、御協力下された多くの方々に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和 51 年 3 月 31 日

仙台市教育委員会 教育長 佐 藤 敬

## 例 言

1. 本報告は、昭和50年1月13日から2月15日にかけて実施された仙台市根岸町宗禪寺横穴群の緊急発掘調査の正式報告書である。
2. 本報告の内容は、緊急発掘による学術的記録と若干の考察を含む。
3. 本文の執筆担当は次のとおりである。  
伊東信雄……1  
葉山杉夫……5 —〈人骨〉  
岩渕康治……2、3、4、5—(1)、(2)—a、d、f、g、h、i、o、(3)—a、6—(1)、(2)、(3)、(4)  
田中則和……5—(2)—b、c、e、j、k、l、m、n、(3)—b、c、〈土師器に関する考察〉
4. 全体の監修は伊東信雄が行った。なお、執筆にあたって氏家和典氏より多大なる御教示を頂いた。
5. 本文中の註釈は本文末尾にまとめた。
6. 宗禪寺横穴群に関しては、調査時において現地説明会資料を発行したが、本報告の記載をもって優先するものと理解して頂きたい。
7. 本調査に関する庶務、専外などは、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。

## 本文目次

序.....	仙台市教育委員会教育長 佐藤 敬
例 言	
1. 緒 言.....	1
2. 横穴群の位置と環境.....	2
3. 調査に至る経過.....	4
4. 調査経過.....	5
5. 調査の内容.....	8
〈横穴各部の名称について〉 .....	8
(1). 横穴の配置状況.....	8
(2). 各横穴の状況.....	10
a. 1号墳.....	10
b. 2号墳.....	12
c. 3号墳.....	13
d. 4号墳.....	15
e. 5号墳.....	18
f. 6号墳.....	21
g. 7号墳.....	22
h. 8号墳.....	24
i. 9号墳.....	27
j. 10号墳.....	30
k. 11号墳.....	30
l. 12号墳.....	32
m. 13号墳.....	34
n. 14号墳.....	34
o. 15号墳.....	36
(3). 出土遺物.....	36
a. 須恵器.....	36
b. 土師器.....	42
c. 鉄製刀子.....	45
〈土師器に関する考察〉 .....	45
〈宗禅寺横穴群出土の人骨について〉 .....	49

6.まとめと考察.....	52
(1).横穴の形態と構造について.....	52
(2).横穴築造上および機能面での問題点.....	54
イ.横穴内部の工具痕のあり方.....	54
ロ.岩盤の亀裂による横穴構造に対する影響.....	56
ハ.横穴閉塞の形態、方法.....	57
(3).遺物の出土状態と横穴の使用年代.....	59
(4).横穴の被葬者について.....	61

### 挿図表目次

第1図 宗禅寺横穴群の位置.....	2
第2図 宗禅寺横穴周辺地形構成図.....	3
第3図 宗禅寺横穴周辺地形図.....	6
第4図 横穴配置図.....	9
第5図 横穴各部名称図.....	10
第6図 1号墳実測図.....	11
第7図 2号墳実測図.....	12
第8図 3号墳実測図.....	14
第9図 4号墳実測図.....	16
第10図 5号墳実測図.....	19
第11図 6号墳実測図.....	21
第12図 7号墳実測図.....	23
第13図 8号墳埋積状況、大井工具痕図.....	25
第14図 8号墳実測図.....	26
第15図 9・10号墳実測図.....	28
第16図 11号墳実測図.....	31
第17図 12号墳実測図.....	33
第18図 13、14号墳実測図.....	35
第19図 15号墳実測図.....	36
第20図 須恵器実測図(1).....	39
第21図 須恵器実測図(2).....	40
第22図 土師器、刀子実測図.....	44

第1表 土師器坏分類表	46
第23図 工具痕模式図	54
第2表 各横穴のまとめ	60
第24図 仙台市内の横穴と関連遺跡	64

## 写 真 図 版 目 次

写真1 宗禅寺横穴群周辺航空写真その1	69	写真23 6号墳正面全景	80
写真2 宗禅寺横穴群周辺航空写真その2	70	写真24 7号墳正面全景	80
写真3 調査前写真	71	写真25 7号墳玄門部	81
写真4 横穴群遺跡	71	写真26 7号墳玄室床面	81
写真5 横穴群全景	72	写真27 7号墳玄室奥壁	81
写真6 発掘作業状況	73	写真28 8号墳正面全景	82
写真7 1号墳玄室	73	写真29 8号墳玄門部	82
写真8 2号墳全景	74	写真30 8号墳玄室右側壁上半	83
写真9 3号墳全景	74	写真31 8号墳天井部工具痕	83
写真10 3号墳玄室奥壁の状況	75	写真32 8号墳前壁	83
写真11 3号墳玄室左側壁の工具痕	75	写真33 9号墳玄門羽寄	84
写真12 4号墳埋積土断面	76	写真34 9号墳玄室人骨出土状況	84
写真13 4号墳全景	76	写真35 10号墳正面全景	84
写真14 4号墳玄室	77	写真36 11、12号墳正面と埋積状況	85
写真15 4号墳右側壁	77	写真37 11号墳正面全景	85
写真16 4号墳左側壁工具痕	77	写真38 12号墳正面全景	85
写真17 5号墳閉塞石の状況	78	写真39 13号墳全景	86
写真18 5号墳玄室遺物出土状況	78	写真40 14号墳正面全景	86
写真19 5号墳玄室発見人骨	78	写真41 14号墳提瓶出土状況	86
写真20 5号墳羨道遺物出土状況	78	写真42 出土遺物(1)	87
写真21 5号墳正面全景	79	写真43 山上遺物(2)	88
写真22 5号墳玄室	79		

# I 緒 言

仙台市文化財保護委員 伊 東 信 雄

仙台市内には多くの横穴群がある。いままでに知られているものを挙げて見ると

1. 岩切入生沢横穴群<sup>①</sup>
2. ~ 台屋敷横穴群<sup>②</sup>
3. ~ 東光寺横穴群<sup>③</sup>
4. 燕沢善応寺横穴群<sup>④</sup>
5. 向山愛宕山横穴群<sup>⑤</sup>
6. 茂ヶ崎大年寺山横穴群<sup>⑥</sup>
7. 根岸町宗禅寺横穴群<sup>⑦</sup>
8. 長町土手内横穴群<sup>⑧</sup>

などがあり、しかもそれぞれが多くの横穴の群集であるから市内にある横穴数はおびただしいものであろう。

これらの横穴は文献的史料の少い当地方の7~8世紀の文化を考える上に貴重な文化財であるが、これまでに学術的な発掘調査が行なわれ、その結果の公表されているものはきわめて少く、善応寺横穴群中の25基と愛宕山横穴群中の10基があるにすぎない。

今回仙台市都市計画道路元寺小路郡山線の工事とそれに伴う宗禅寺墓地の整理によって宗禅寺横穴群の大部分が破壊される危機にひんしたので、仙台市教育委員会では関係者の協力を得て、事前測定を実施し、その14基を発掘調査した。

その結果をここに報告して、7~8世紀の仙台地方の歴史を偲ぶ資料とする。

## 2. 横穴群の位置と環境(第1、2図・写真1、2)

宗禅寺横穴群は、仙台駅南方約2.0キロ、仙台市根岸町204他、宗禅寺境内にある南向き崖面に群在する。横穴群のある崖面のすぐ東側を北西から東南方向へと広瀬川が流れ、また西側は市道元寺小路—郡山線(旧東街道)をはさんで、中世の仙台、名取地方の領主、栗野氏の居城茂ヶ崎城が築かれた標高120mの大年寺山が迫っている。横穴群付近の標高は20m前後である。横穴群の広瀬川をはさんだ対岸は完全に仙台市街の中心部であり、また、南はこれまた仙台市の南部市街地ともいるべき長町があり、昭和48年6月、10月に調査された愛宕山横穴群とともに市街地のただ中にある遺跡といってよい。

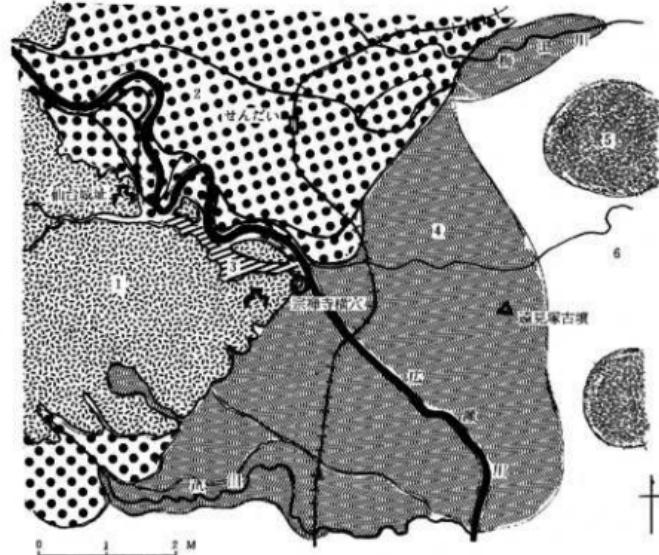
次に地形の概況を見てみよう。仙台市街は三方を丘陵および山塊で囲まれている。すなわち北は小田原、台の原、北山丘陵および国見山塊、西は青葉山丘陵、西南部は、八木山大年寺丘陵であり、その中を北西方向から東南方向へと広瀬川が蛇行しつつ流れ、東部および東南部は平地となって開け、太平洋に面している。市街中心部は、この広瀬川の北岸に形成された3~4段に及ぶ発達した河岸段丘の上に立地している。宗禅寺横穴群は八木山、大年寺丘陵の最東端部と広瀬川の接点付近に位置する。

地質的に見れば、<sup>⑦</sup> 横穴群の位置する宗禅寺付近では地表から厚さ1~2mの範囲で黄色火山

第一回  
宗禅寺横穴群の位置  
○宗禅寺横穴群



第2図 宗禅寺横穴周辺地形構成図



1. 山塊、丘陵部 2. 河岸段丘 3. 埋積谷  
4. 自然堤防・扇状地 5. 低湿地形 6. 海岸平野

灰層、段丘疊層がありその下に基盤岩層が堆積する。基盤岩層の最上層は、新第3紀鮮新世末期の大年寺層（軟質の青灰色もしくは灰黄色凝灰質シルト岩ないし砂岩＝絶対年代 B.P 100～200万年）であり、その下には、八木山層（細粒凝灰岩、軽石質凝灰岩が主で中に厚さ1m内外の亜炭層を含む。）が位置する。この大年寺層、八木山層とも河川ないし浅海性の堆積層で層中に多量の貝や木葉化石等を含んでいる。このうち宗禅寺横穴群は、おおむね大年寺層を中心として構築されているがこの大年寺層には、随所に節理のクラック（割れ目）があり、かつ下層の八木山層が不透水層であるため涌水が多く、これが後述するように横穴の構造の上（特に排水溝の配置など）にも影響を及ぼしている。宗禅寺横穴のある崖面は調査直前には比高2～3mできはほど目立たない段状の地形であったが、発見された横穴の床面は調査前の地表面よりも1～2mも下がり、またすぐそばの広瀬川の河床との比高は、10m前後であった。つまり横穴の南前面は現在は平坦な畠地、墓地であるが、大年寺山に水源を発し、広瀬川に流入する小規模の埋積谷の地形を形成していたものであった。宗禅寺横穴群は、この埋積谷の入口部分に形成された横穴群である。

次に、宗禅寺横穴群を中心とする周辺地域の遺跡分布については、仙台市文化財調査報告書

第8集「愛宕山横穴群発掘調査報告書」における記載と重複することが多いので、ここでは古墳分布などを中心としてその特色を箇条書き風にまとめておこう。

①、仙台市内における横穴群の分布は岩切、燕沢、向山、西多賀の4ブロックに分けることが可能であるが、これらはいずれも市内の3つの丘陵の東端部の複雑に入りこんだ崩れ谷地形もしくは埋積谷の中腹に位置している。

②、各横穴群の前方に開けた平地部分には高塚古墳の分布が認められる。宗禅寺横穴群の近辺に所在する古墳としては兜塚古墳<sup>⑤</sup>(五世紀後半?、前方後円墳?、軸長50m余)、遠見塚古墳(5世紀前半、前方後円墳、軸長110m)、法領塚古墳<sup>⑥</sup>(7世紀?、円墳、径32m)などがある。

③、横穴群の分布はまた、大小の河川の近辺であることが多いが、これらの河川の自然堤防上などには横穴群形成の基盤である古代の集落跡の成立が見られる。宗禅寺横穴群の近辺の集落遺跡としては頗る著名なものは弥生~平安時代の大集落遺跡である南小泉遺跡があげられる。

なお宗禅寺横穴群のある宗禅寺は中世以来の古刹で、中世の名取地方の領主で大作寺山に茂ヶ崎城を築いた栗野氏の菩提寺であり、境内には領主栗野大膳の墓が現存する。

### 3. 調査に至る経過

宗禅寺横穴群は、昭和28年暮れ、官沢橋かけかえ工事に伴う広瀬川沿いの道路改修工事のため、宗禅寺付近の崖面の一部が切り崩された際に1基発見されて初めて注目されるに至ったものである。それ以前にも開口、変造され、人が住みついたりしていた横穴などがあることは土地所有者である宗禅寺などによって認識されてはいたが、全般に、横穴の埋没度が深く実態も不明ではほとんど横穴群の存在は一般に周知されていなかった。もちろん正式な学術調査はされたことがない。しかし、昭和初期以来識者の間では、仙台市向山地区には横穴が数多く存在することが報ぜられていたので、付近になお横穴が埋没している可能性は考えられていた。その後昭和48年に仙台市教育委員会では、仙台市文化財分布図作成にあたって宗禅寺横穴群を保護対象物件C-033として公式に登録し、その周知方に努めた。

しかるに、昭和47年仙台市建設局道路部企画による都市計画道路(元寺小路一郷山線)工事が向山地区において具体化する運びとなり、昭和48年6月、10月には愛宕山横穴群B地点の事前調査が仙台市教育委員会によって実施された。この愛宕山横穴群の東南500m付近に位置する宗禅寺横穴群は当初範囲が不明確で、この道路部分にかかるかどうか不明であったが、道路工事による宗禅寺境内の墓地移転および墓地川地造成工事区域に宗禅寺横穴群の範囲が確定に含まれることがはっきりしたため、仙台市教育委員会が横穴群の保護対策について、仙台市建

設局道路部、開発局用地部、墓地所有者である宗禅寺などと協議の結果道路部が仙台市文化財保護委員伊東信雄に事前調査を委託することになったものである。

調査体制は次のとおりである。

▽予算総額：880,000円

▽調査期間：昭和51年1月13日～2月18日

▽調査主体：仙台市教育委員会

仙台市建設局道路部

▽調査担当者：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）

▽調査員：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

（社会教育課長）東海林恒英

（文化財係長）瀬戸捷夫

（文化財係主事）鈴木高文、岩渕康治、朝倉秀之、田中則和、門間美郎

（文化財係嘱託）大泉重治

▽調査参加者：

葉山杉夫（東北大学歴史学部助教授）

恵美昌之、高橋守克（宮城県教育庁文化財保護課）

佐々木安彦（泉市向陽台小学校教諭）

山川稔、大槻良子、門馬真一郎、工藤哲司、渡部弘美、星昌吾、（東北学院大学考古学研究部）

学研究部）让秀人（東北大学考古学研究室）三塚敏明

▽整理補助：今野章、高橋春美

▽調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

仙台市開発局用地部

岩井信弘（宗禅寺住職）

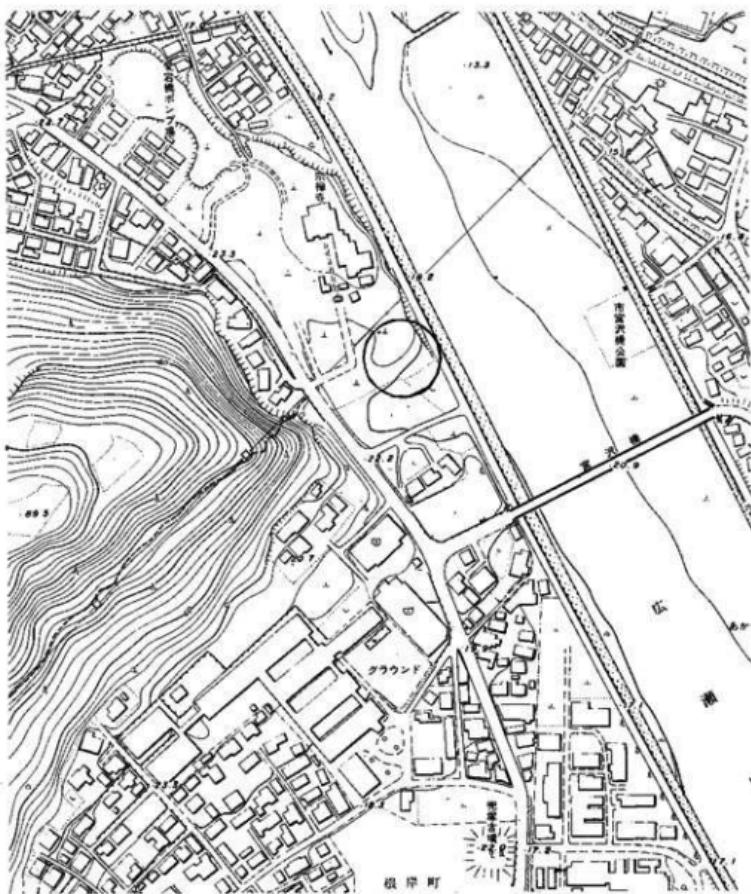
株式会社 橋本店

株式会社 鈴木石材店

※所属はすべて調査時点のものである。

#### 4. 調査経過

調査は、工事（道路、墓地用地造成）区域内の全崖面を対象として実施した。この崖面は墓地用地内にある崖面で、調査は墓地の移転工事と平行して進められた。発掘総面積は約300m<sup>2</sup>



第3図 宗禪寺横穴周辺地形図 (○印横穴群)

縮尺=約3,700分の1

に達した。

#### 〈調査前の状況〉

調査前における遺跡の状況は崖の上段および下段に墓石が林立しており、崖面は雑木林となり、またかって開口していたと思われる部分の横穴も危険防止などの目的で完全に埋められ、表面的には開口している横穴は全く見られなかった。ただ崖の東端部の広瀬川堤防上の道路に

面して、掘削された部分には、昭和28年暮に道路工事の際に発見されたといわれる横穴の残骸が  
座み状になって残っていた。

### 〈調査の経過〉

表土排除作業は当初手掘りで実施した。しかし、表土の厚さが予想以上に厚く、1月15日には、小型ブルドーザーの導入によって表土排除を継続した。その結果、崖の上下の高さは当初2m前後であったのが表土排除後は崖東端の最高部で5~6m、崖西端の最低部でも3mほどの高さのものとなった。調査はブルドーザーの導入や墓地移転工事の進行状況などの関係で崖西端方向、つまり埋積谷の奥の方から着手された。その結果基盤岩層を検出した段階で西側から次々と平行方向に横穴が検出されはじめ、最終的には14基の横穴が確認された。いずれも埋没度が深く保存状況の良好なものが多かった。横穴の内部には落盤などによる基盤崩壊土が特に玄門付近から後退部にかけて厚く堆積しているものが多くあった。これら流入土の堆積状況および玄門閉塞施設および遺物出土状況の実測、写真撮影などを行い、1月23日までにはほぼ横穴の全容検査を終えた。1月24日には、5号、9号墳で出土した人骨の調査のため葉山杉夫氏（東北大学助教授）に参加を頂いた。

なお、同日、報道関係者への発表を行い、また翌25日には一般公開を実施したが、強風下にもかかわらず、200人を越える見学者があり、盛況であった。その後も、毎日のように数十人くらいの見学者があり市街中心部に現存する貴重な文化財に対する市民の関心の深さを痛感させられた。また報道関係でも再三特集を組むなどの企画があり、今回の調査は一般市民の間に予想以上の反響を呼んだ。

1月25日に横穴群の全景写真の撮影を終え、1月27日から横穴群の最終実測を東北学院大考古学研究部学生諸君および宮城県教育委員会文化財保護課の応援を受けながら実施し、また各横穴の最終写真の撮影も並行して行った。その後補足吟味調査などを行って2月18日に一切の調査を終了した。

この間、14基の横穴の保護対策などについて関係各方面と協議検討したが①現状のままの保存は不可能であり、②典型的な家形横穴の形態を有する8号墳の永久展示公開は墓地所有者の宗憲守から了承をえられながら、それに替わる墓地用地の代替地がないなどの理由で果たせず、結局1、2、4、9号墳が削平によって破壊されるほかは、すべて埋め戻され、新しい墓地用地の下に深く埋没することになった。2月20日に、横穴はすべて埋め戻され、その後道路建設および墓地造成による盛土のため横穴のあった崖面は埋没した。現在は跡形もなくなったかのように平坦な地区となっていて、横穴の存在を想定することは困難な状況にかわった。

### 〈調査資料の整理、編集〉

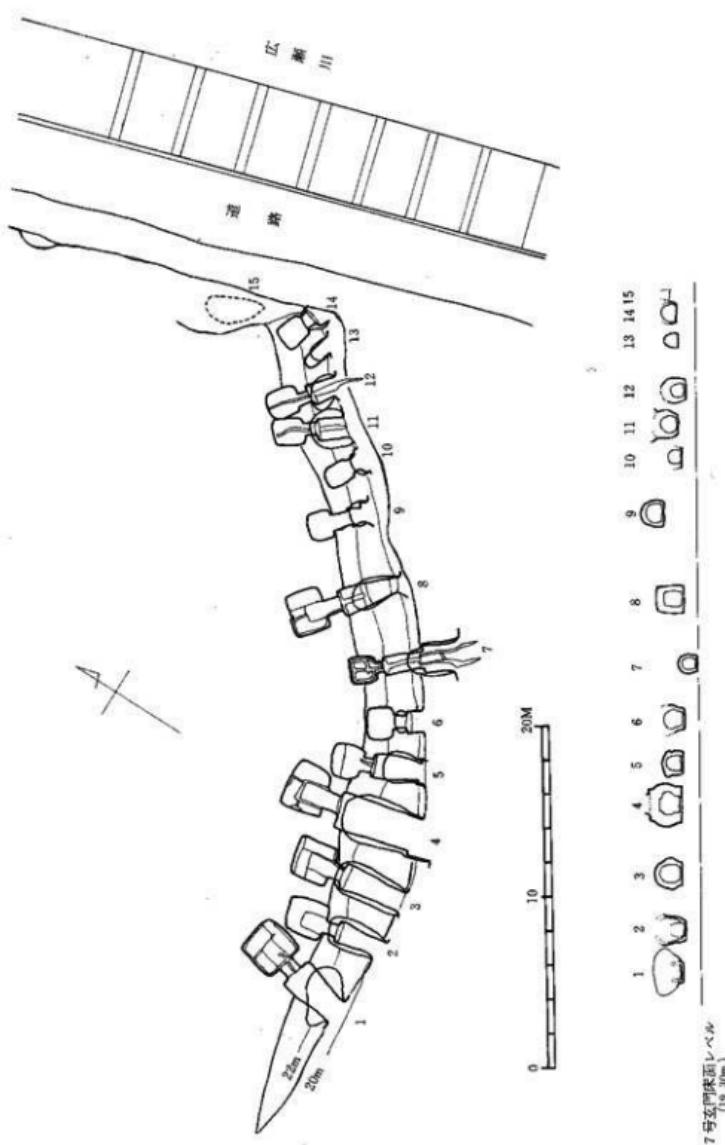
調査資料の整理は、出土品の洗浄は主に現地ですませ、その後の分類、実測などは、昭和50年5月ごろから、他の現場作業の合間をねって徐々に実施した。この間、東北学院大OB今野章君の援助があった。出土品は、昭和50年6月～7月にかけて、仙台市博物館で実施された「仙台の文化財展」でも出品された。

## 5. 調査内容

### (1) 横穴の配置状況(第4図、写真5)

今回の調査で発見された横穴は合計14基であり、それぞれ発見の順序に従って1～14の番号を付したが、調査の進行が崖面の西側から東側へとスムーズに進行したため、西から東へと順序よく番号が付される結果となった。なお、昭和28年暮れに発見された横穴は一応15号墳と命名しておく。

横穴群の位置する崖面は平面的には、中ぶくらみの外反する曲線を描く。そして崖西端付近ではほぼ南面し、中央付近では東南東に面し、東端付近では東南方向に面している。各横穴はいずれもほぼ崖の稜線に直交するような形で築成されているので、各々の開口方向もまた崖面の方向とほぼ一致した方向を示している。軸線方向毎にブロックとしてまとめてみると5つのブロックにわかれる。すなわち(A) NE10°前後=1号墳、(B) NW10°前後=2、3、4号墳、(C) NW30°前後=5、6号墳、(D) NW45°前後=7、8、9、11、19号墳、(E) NW50°以上=10、12、13、14号墳となる。各横穴間の間隔を見ると、2、3、4、5、6号墳の間隔が、1.6～2.1mとほぼ一定した間隔を保っている。最も接近しているのは、開口部では13～14号墳だが、11、12号墳は各々、玄室部分において切り合っている。最も間隔が離れているのは7～8～9号墳で、それぞれ3.2m、3.5m間隔である。しかも、この3基は高低差も顕著なので、各々が孤立した感じのものとなっている。特に8号墳の場合は、その構造とも考えあわせてそうした配置のしかたが注目される。そのB面から見た横穴の高低の上での配置状況については今回調査分に限っては7号墳、9号墳を除けば、大略、一定レベルのもとで築造されている。9号墳は最上段に位置する横穴で、築成部位は段丘疊層ほとんど直下に近く位置しているが、これと並列する横穴は他には見あたらない。7号墳は、今回の調査では最下段に位置するもので、これも他に並列するものは発見されなかった。しかしながら、一部深掘りによって確認したところによれば、本来の崖面は今回の調査した部分より表上卜深くさらにお下方に潜っており、さらに下の方に横穴が埋没している可能性は十分考えられる。い



第4図 横穴配置図

それにしろ、7号、9号を除けば、他の横穴はほぼ一定レベルの上に築成されたものということができよう。なお今回調査横穴の玄門入口部分での平均標高は20.77mであり、7号横穴では19.30m、9号横穴では21.56mである。各横穴の遺存状況は、概して良好であったが、1～3号墳は早く開口したものらしく、変造の度合いも著しかった。また14号墳も川沿いの道路ぎわにあって破壊の度合いが目立った。その他の横穴では埋没の度合いが深かったせいもあるってか、後世の変造を受けた形跡はほとんど見られず、築造状況を良好に観察できるもの多かった。

## (2) 各横穴の状況

### 〈横穴各部の名称について〉(第5図)

横穴各部の名称については全国的にはまだ必ずしも統一しきっていない面があるようであるが、本稿では特に、氏家和典氏らの最近の論文<sup>⑩</sup>に用いられているものを採用させて顶くこととした。

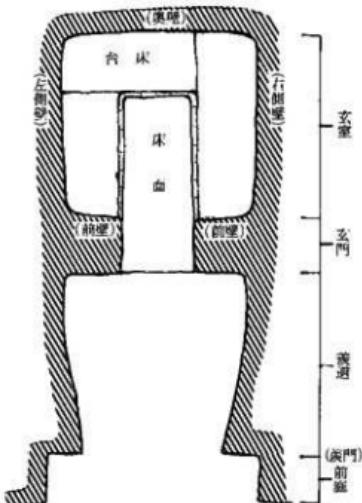
#### a. 1号墳(第6図)

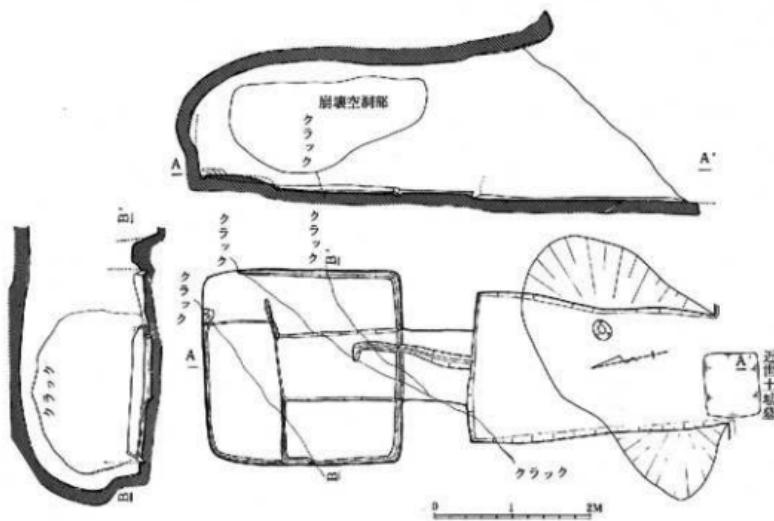
##### 〈確認状況〉

崖面の最も西端で発見された横穴である。この横穴は現在の墓地の主要通路に近く位置していて、埋没度が浅く2号墳とともに古くから開口して浮浪者等が住みついていたらしく、横穴上半部を中心として相当の変造がなされ、玄室東側はくりぬかれて2号墳の玄室と完全に連結していたので立面形の判定はほとんど不可能である。しかし幸いなことに、横穴床面上に厚さ30m前後の覆土が堆積し、浮浪者の生活もその覆土上で行われていたものらしく、後世の変造もその覆土よりも上に限ってなされていた。従って平面形の遺存状況はきわめて良好であった。横穴の主軸の全長は6.6mで方向はNE 13° 00'である。

〈玄室〉 玄室の平面形は、奥行2.5m×幅2.3mほどの隅丸方形である。立面形は、前述した

第5図 横穴各部名称図





第6図 I号墳実測図

とおり、上半部がほとんど変造もしくは崩落しているためほとんど復原不能だが、わずかに奥壁の立ちあがりが垂直に近い状態などから推定すると、アーチ型に類したものではないかと思われる。高さは、現状では1.3~1.6mだが、当初の高さは不明である。

台床は3つに区分されているが、ちょうど玄門部から玄室中央部にかけての長方形のくりこみ(床面)をとり開むような形の配置となっている。台床は高低差および排水溝によって区分されているが、奥壁の左3分の2ほどの部分に沿って細長く配置された台床が他の台床よりも一段高く、床面との高低差は20cm前後である。他の2台床は中軸線を間に対称の位置にあり、高さはほぼ同じであるが、奥の台床が左側にかたよって配置されているため、大きさは右側の台床の方が大きい。それぞれ床面からの高さは10cm程度である。排水溝は、玄室周壁沿い(北東隅はない)および奥の台床と左台床との間などに配置されている。幅は5~8cm、深さ3~4cmの小さなもので、断面形はV字形である。ところで、これらの排水溝の配置は図6からもわかるように、この横穴に顕著に認められる基盤岩層のクラック(割れ目)を意識していることが明らかである。玄室においては、3本のクラックが北東方向から南西方向へ走っていることが認められ、このクラックからは、調査時においても、涌水の浸透が顕著であった。また台床の配置が必ずしも均整を欠く点も、このクラックの影響を見るべきなのかもしれない。全般に整形の痕跡を伺うことは困難であったが、わずかに奥壁付近の壁面最下部にて、斜め下に打ちおろし

たような、幅5cm前後の工具の痕跡が認められた。なお床面は平坦で奥から玄門方向にかけてゆるく傾斜している。

〈玄門〉 玄門は幅90cm、奥行85cmで、中軸線は玄室のそれとほぼ一致する。玄室との境界部分には、幅10cm、深さ2~3cmほどの溝が横断し、また玄門の中央部にも、玄室床面からはじまり、羨道部分に達する溝がある。。立面形は全く復原不能である。玄門床面は玄室床面とほとんど同じ高さであるが、羨道部との間に低い段を形成する。閉塞施設らしきものは全く確認できなかった。

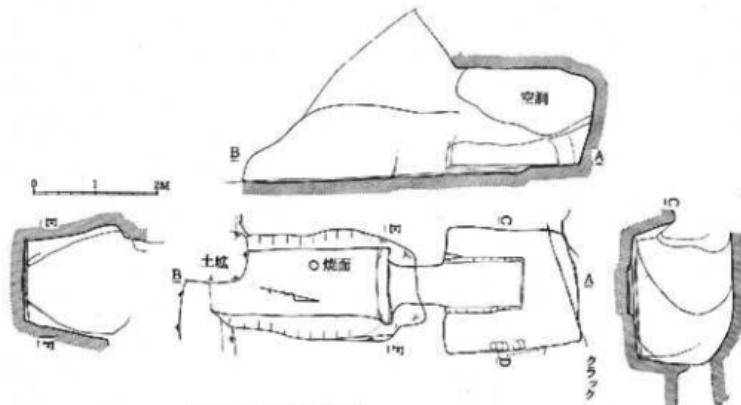
〈羨道〉 羨道は、玄門入口部分との境界付近での幅1.8m、最も入口よりでの幅1.4m、現存の長さ3.2mと細長い。軸線は、玄室、玄門のそれとほぼ一致する。床面は玄門のそれより5cmほど下がる。ほとんど平坦である。立面形は不明だが、現在天井が変造されてはいるが完全に崩落せずに残っている範囲は玄門入口前方1mほどまである。なお現在の入口付近では、近世の土塁墓(0.8m×0.7mの方形)が掘りこまれていた。

〈その他〉 羨門、前庭などは確認できなかつたし、横穴に関連する遺物の出土もなかつた。

#### b. 2号墳(第7図、写真8)

〈確認状況〉 表土を排除して羨道部を確認。地元民の話では、昭和初年頃には開口していたが後に埋め立てたとの事である。

〈位置〉 南面する横穴群の西端近く、1号と3号のはば中間に位置する。最も近接する1号横穴の玄室との距離は最短部で30cmを測る。玄門入口の床面レベルは、1号より約0.3m、3号より約0.2m下がる。方位はNW11°20'を示す。奥壁から現存する羨道部の端までの全長は6.0m



第7図 2号墳実測図

(中軸線上)を測る。玄室の左右壁の一部は後世の掘削によって1、3号と通じ、玄門より羨道部に至る天井部は崩壊している。各部共に、天井、壁の剥落が著しい。成形並びに整形痕は認められない。

〈玄室〉 玄室は奥行2.2m(中軸)、右側壁2.15m、左側壁1.9m、幅は奥壁で1.7m、入口では2.0mを測り、平面形は不整長方形プランを示す。立面形は、後世の掘削により、左壁、天井が削られているため、アーチ型を推定するにとどまる。高さは1.65m、奥壁の立ち上がりはかなり奥の方に傾いている。床面には、奥壁および両側壁に接してコの字形に無縫の台床がつくられている。台床の高さは8~9cmを測る。東側壁沿いの台床面には、幅10cmほどのウロコ状の工具痕がわずかに認められる。床面の傾斜は、ゆるやかである。

〈玄門〉 玄門は玄室の正面にあり、奥行90cm(中軸線上)、幅60cmを測る。立面形は、天井部が崩壊しており推定は困難であるが、あえていえば、壁下部の立ち上がりからみてアーチ型の可能性がある。

〈羨道〉 羨道部は長さ、残存端まで2.95m、幅はほぼ一定で1.2mを測る。立面形は天井部の崩壊のため不明である。玄門入口床面には、中軸に直交して、長さ1.25m、幅20cm、深さ2cm(最深部)の溝があり、閉塞用と思われる。なお、羨道部中央西よりの床面に、径10cmほどの円形の範囲に焼面が認められた。

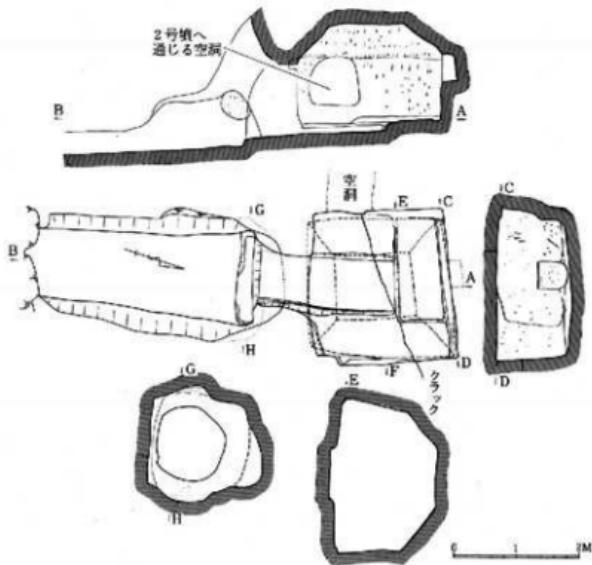
〈遺物〉 遺物は、須恵器の破片が3点のみである。羨道部人口付近埋積土上層からは、須恵器長頸瓶類部片、同底部片が各1点出土している。玄門部埋積土下部からは、須恵器長頸瓶類部片が出土している。

#### ○. 3号墳(第8図、写真9、10、11)

〈確認状況〉 発掘調査によって発見された横穴である。表土を排除して羨道部を確認した。羨道部は流入土で壅がっていたが、玄室の流入土はごくわずかであった。

〈位置〉 2号、3号、4号の中軸線はほぼ平行しており、本横穴はこの2号と4号のほぼ中間に位置する。2号中軸より3.0mを測り、その床面より0.3m高い。また4号中軸より4.0mを測り、その床面レベルはほぼ同じである。開口方向はNW13°50'を示す。奥壁から現存する羨道部の端までの全長は6.8mを測る。玄門入口部分及び羨道の大井は崩壊している。玄室左壁の一部は2号玄室右壁まで掘りぬかれている。奥行約1.0m、幅約0.75m、高さ約0.8mで、3号玄室左壁における立面形はアーチ型を呈している。本横穴において非常に目立つのは、玄室の天井、壁面の全面にみられる特異な工具痕である(第23図II d)、この工具痕を観察すると、鋭く突き刺さった先端部分(幅数mm~1cm未満)と突きささる以前に、壁面を断面V字状に削りこんだ部分(長さ2~8cm)に区別できる。従ってこの工具痕はピッケル状の先の尖った工具で、主に上から下へ振りおろしげみに掘削したことを示すと思われる。

（玄室） 玄室の平面形はいびつな方形プランを示す。奥行2.2m、幅2.3mあり、側壁と奥壁及び側壁と前壁は直交していない。左壁の奥半、右壁の前半には、いく分台床より高くなっている部分がある。平面形は細長い三角形であるが、その粗雑な凹凸などからみて後世の掘削によるものと思われる。天井部は、四角錐台（伏斗式）の家型を呈している。天井中央最高部の長方形の平坦部の長軸は横穴の中軸にはほぼ一致している。平坦部は長さ1.25m、幅1.0m。床面から平坦部までの高さは1.7mを測る。しかしながら、このような天井部の形態については、後述する理由から横穴築成時のものと断定するには若干疑問が残る。



第8図 3号墳実測図

床面には3つの無縁台床がつくられている。台床の幅は3つとも約65cmを測る。高さは左右の台床はともに床面より10cmを測り、ほぼ平坦である。奥の台床は、高さ約12cmで、入口に向かって緩やかに傾斜している。奥の台床で注目されるのは、玄室幅いっぱいにつくり出されておらず、奥壁左側にかたよった状態で作られていることである。これは、床面上を右台床に沿った形で走りながら幅を増して玄門入口に達する小溝の存在とともに、玄室天井を横切るクラックのあり方と関連するのかも知れない。なお、台床面及び台床に開まれた床面には上述した特異な工具痕はみられず、滑らかである。

本横穴に顕著にみられる工具痕は、本横穴群に於ても唯一の特異な工具痕であるが、その痕跡は前述の2号に通ずる掘りこみ、そして奥壁上半に掘られた、立面形がアーチ状を呈すくりこみ（高さ50cm、幅45cm、奥行20cm）の壁面にも及んでいる。このようなピッケル刺突状痕跡がみられるくりこみを持つ横穴の例は、仙台市内の善應寺横穴群<sup>⑩</sup>や東光寺横穴群にみられ、

この場合、かなり大規模に玄室等が改変されている点などから、後世の掘削によって横穴が改変されたものとみなされている。従って本横穴に於ても後世の改変によって伏斗式の立面形が形づくられた可能性を残しておく必要があると思われる。

〈玄門〉 玄門は玄室の正面にあり、奥行95cm、幅83cmを測る。立面形はアーチ型である。

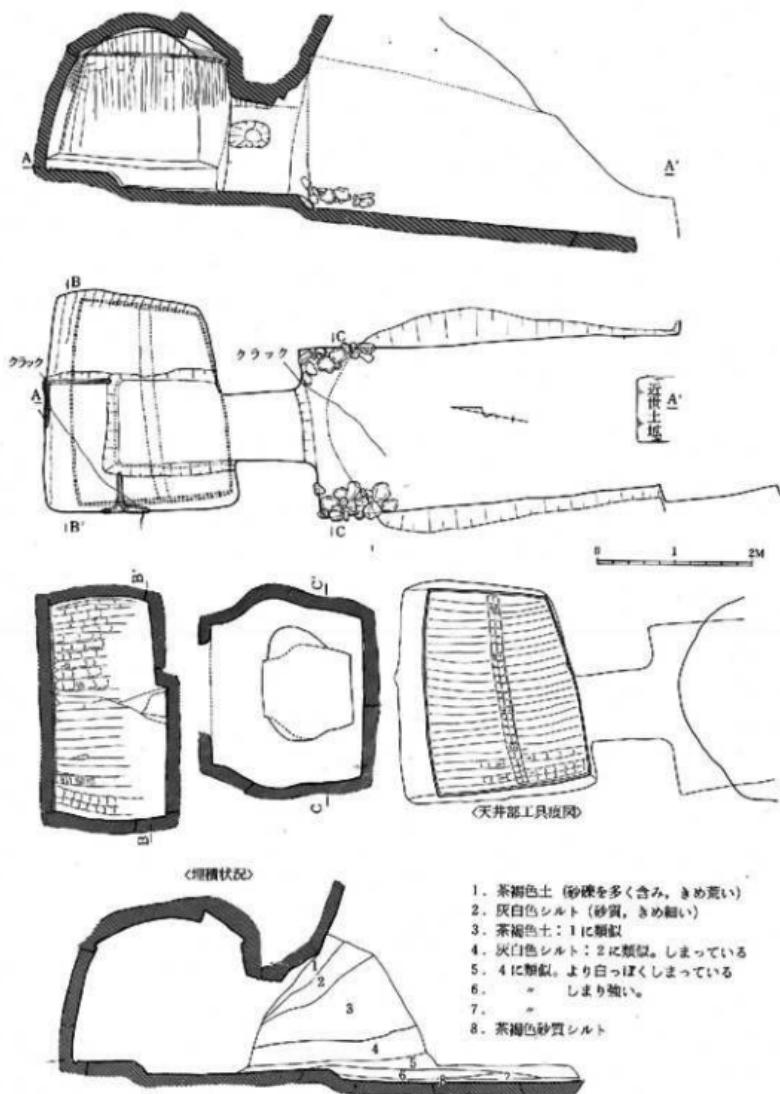
〈談道〉 談道部は、奥行、残存する端まで3.4m、幅は玄門入口で1.5m、残存端部で1.07mである。玄門入口の床面には、中軸に直交して、反さ1.5m、幅20cm、深さ8cm（鍵深部）の開窓用と思われる溝がつくられている。玄門入口の残存両側壁の上半には、径約60~70cmの不整な円形の範囲に、浅くえぐりこまれたような状況が見られる。そして、えぐりこまれた部分には粗い工具痕が観察される。

〈遺物〉 なし。

#### d. 4号墳(第9図、写真12~16)

崖の中央西よりの部分で崖の等高線が弧を描く変曲点付近に位置する。全体の中では西から4番目に発見された。この横穴の埋没度は相当深く、談道（談門を含む）および玄門部はほとんど深い埋積土に覆われていた。埋積土は最高厚さ1.8mにも及んでいた。これらの埋積土は、おそらく談道部の崩落を原因とするもので、埋積土の上部は、基盤岩層の上に位置する段丘疊層の崩壊によるとと思われる疊を多量含むきめの荒い茶褐色砂質土を主成分とし、下部は上部基盤岩層（大年寺層）の崩壊によると思われる灰白色シルト層を主成分としていた。遺存状況は、談道部天井および玄門入口の一部が崩落していたほかは、総体的に保存良好で、特に遺存する平面形の全長は8.5mにもおよび、今回調査の横穴の中では最大のものである。全体の形を見てみると、各部ともに厳密には若干の歪みが見られ、左右対称とはなっていない。従って主軸も、各部分の中央部を一致させる訳とはいかないが、その方向はおおむねNW11°前後である。

〈玄室〉 玄室内には埋積土はほとんど見られなかった。ただ入口部分に閉塞石と思われる河原石（径10~20cm）が20個ほど入りこんでいた程度である。玄室の平面形は台形を横にした感じの不整形である。その大きさは奥壁幅が2.75m、前壁部分の幅が2.55m、左側壁の奥行が2.45m、右側壁の奥行が1.8mとなっている。立面形は、切妻造りの家型で天井と壁との境界に屋根の軒回りの線を示す幅3cm、深さ3cmほどの刻線が四周をめぐっている。いわゆる整形系の横穴と呼ばれるものの範ちゅうに入れてよいものであろう。壁は直立せず、やや内側に傾斜するので、天井部の面積は床面の面積よりも狭くなる。軒回りの線の四壁における長さは奥壁で2.6m、前壁で2.3m、左側壁で1.95m、右側壁で1.5mである。軒回りの線から屋根の棟線までの高さは35cmほどで屋根の線は上に凸の感じで湾曲し、この屋根の線の表示も両側壁の上端部（すなわち妻の上端）において、細い沈線で表示されている。なお、屋根の棟柱の表示は見



第9図 4号填埋実測図

られなかった。床面からの棟までの高さは2.0mである。なお、天井部北西隅付近に直徑30cmほどの穴があいておりそこから人骨がはみだしているのが見られたが、これは、この横穴の上に近世以後の墓地があり、墓塚が深く掘りこまれて横穴のすぐ真上にまで達し、埋葬後時日を経過したあと崩落したものである。そのほか、天井部玄門よりの部分にも自然崩落の形跡があり、横穴が形成された基盤岩層のもうさを示している。

台床は高低差、溝の配置から3つに区分できる。やはり、1号、3号同様中央部床面をとり開むような形で配置されているが、前者と異なるのは右側壁沿いに配された台床が最も高く大きいことである。床面からの高さは25cm程度である。他の2台床は、ほぼ同じ高さで溝によって区分されるが床面からの高さ15cmほどである。なお、いずれの台床にも縁は認められない。溝は、1号塙の場合のように多くは見られず、わずかに台床間を区分する部分にしか見られない。しかしここでも、やはり玄室奥壁中央から左側壁中央にかけてクラックが認められ、溝の配置は見事にそのクラックの位置と一致する。最も高い台床が、1、3号塙の場合とその配置はちがってもクラックを避けて造られている点では全く共通しているのである。

この横穴では、床面の一部および台床部分を除き、全体にわたって美麗な整形工具の痕跡を伺うことができた。荒削りの痕跡は全く伺うことができなかつた。工具痕は幅10cm前後で平坦な面を形成してほとんど凹凸は見られなかつたが、断面形態および平面形態に丸味が認められるので、この工具も刃先の形態が丸味をおびた薄手の鉄製カンナのようなものではなかつたと想定される。工具痕の方向もきわめて整然としている。すなわち、四隅の側壁は上から下に、天井部では屋根の頂上すなわち棟から軒先方向へ、また棟線は左から右へとほとんど一定の工具敷形がほどこされていた。床面および台床部はやや磨滅した形跡が見られ、ノミの形跡は認められなかつた。なお玄室内では遺物の出土はなかつた。

〈玄門〉 玄門は、玄室の中央部分にはとりつかず、左よりに配置されている。これは、最も高い台床が右側壁沿いに位置していることと関連するものであろう。玄門の幅は85cm、奥行95cmである。立面形は一部崩落があるが、おおむね中ぶくらみの方坑である。つまり天井にはほとんど丸味がないのである。なおここで注意したいのは、8号塙などでも見られるのが玄門入口から中央付近にかけて側壁中段付近が浅くえぐられた形態をとっていることで、これは自然崩落によるものではないので、何か閉塞に関連する構造なのかもしれない。なお玄門と玄室との間に構のようなものはなく一連の平坦な床面となつてゐる。工具痕は天井部においてのみ、その形跡を認めることができた。工具痕の形態は玄室の場合と同様で方向は軸線に直交する方向に上から下に向かって施されていた。

〈渡道〉 渡道の軸線は、玄門の軸線とはば一致するが、玄室のそれとは若干ズレを生じておりいく分西よりを差している。これもやはり、玄室内の最も高い台床が右（すなわち東）よりにあることと関連するのだろうか。平面形は長方形で、玄門入口部分での幅2.2m、渡門部での

幅1.9mで、長さは4.5mもあり、今回調査の横穴の中で最大の羨道である。立面形は天井部のはほとんどが崩落しているため復原が困難だが、わずかに残された痕跡から判断すると、玄門同様中ぶくらみの方坑状を呈するものらしい。高さは2mほどである。床面は玄門入口部分で15cmほど下がった段となっているが、全般にはほとんど平坦で羨門方向にかけてゆるく傾斜している。工具痕の形跡は磨滅のため認められなかった。

なお、玄門入口部分よりの両隅に多量の河原石が重なっており、その間に、土師器、須恵器の破片なども散見できたが、5号墳などに見られるような整然とした閉塞状況を示しておらず、いわば、追葬時などに閉塞石が両脇にとりまとめられたような印象をもつ。

（その他） 羨門の痕跡をかすかにとらえることができた。それによれば幅は2.2m余である。羨門右脇には須恵器（長頸瓶）破片が一点発見された。

（遺物の出土状況） 遺物は合計5点ほど発見された（土師器3、須恵器2）が、いずれも羨道部の側壁よりにおいてである。羨道部は厚い埋積土に覆われていたが、埋積土の上部および床面直上では遺物は全くなく、床面に数10cmほどの埋積土最下層上で検出されている。

#### e. 5号墳(第10図、写真17~22)

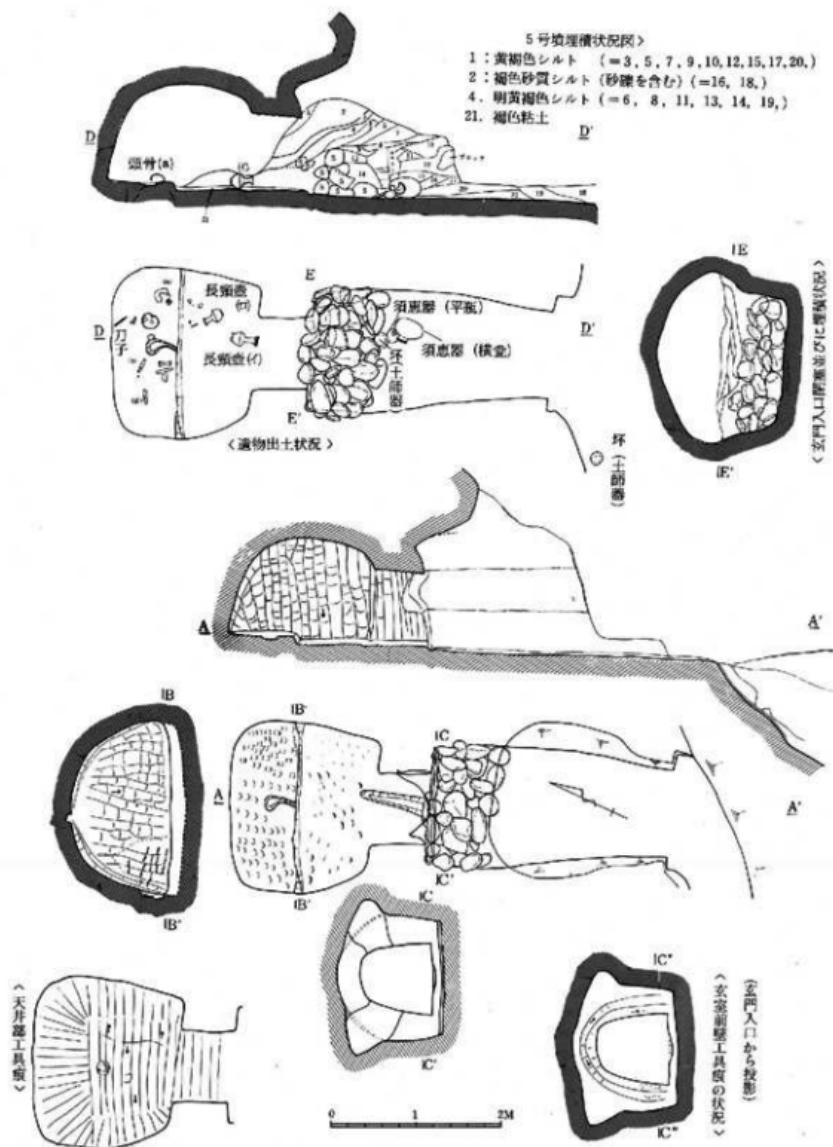
（位置） 4号と6号のはば中間に位置する。4号とは玄室の北西コーナーにおいて最も接近し、その壁間の厚さはわずか数10cmを測るのみである。床面レベルは0.3m低い。6号（中軸線）とはほぼ平行し、その中軸からの距離は約2.5mを測る。床面レベルもほぼ同じである。方位はNW26°10'を示す。

（確認状況） 埋積土を除去し、羨道部を確認した。羨道部は細かい分層が可能な地山崩壊土（遺構確認地点で厚さ約90cm）及びその上にかぶった表土（厚さ約30cm）で充満していたが、玄門部で流入土の厚さは急激に減じ、玄室では、入口部の床面にわずかに堆積するのみであった。奥壁から残存する前庭までの全長は5.5mを測る。玄室、玄門の遺存は良好であるが、羨道部の天井は崩落している。前庭部は、わずかに残存する羨門部の壁の立ち上がりで確認されるのみである。床面の傾斜は、玄室、玄門ではほぼ平坦であるが、羨道部は入口方向に緩やかに傾斜している。

（玄室） 平面形は不整な隅丸方形プランを示す。中心軸上の奥行は1.7mを測り、右壁の長さと同じであるが、左壁は1.5mと短かい。幅は、奥壁で1.8m、中央で2.0m、前壁で1.5mを測り、左壁がややふくらみぎみである。立面形はドーム型を示す。高さは中央部で1.25mを測る。奥壁に沿って無縫の1台床がつくられている。奥行は75cm（中央部）で玄室のはば奥半を占める。台床面は平坦であり、ほぼ全面に、いわば馬てい状とも形容するような粗い工具痕跡を残している。高さは床面から10cmを測る。台床面には、中央より入口方向に走る深さ4cmの溝状の凹みがある。しかしその不整な形状から排水溝とは断定し難い。この台床面には流入

5号墳埋蔵状況図

- 1: 黄褐色シルト (=3, 5, 7, 9, 10, 12, 15, 17, 20.)  
 2: 褐色砂質シルト(砂礫を含む) (=16, 18.)  
 3: 明黄褐色シルト (=6, 8, 11, 13, 14, 19.)  
 21: 褐色粘土



第10図 5号墳実測図

七はみられず、厚さ1~2mmの褐色粘土がおおっており、その上面で人骨1体分? が認められた。(人骨についての詳細は別稿にゆずる。) 人骨は、いずれもかなり風化しており、頭骨が右壁側に、肢骨類が数点左壁側に残存している。その他、周辺に若干の骨片が認められた。この人骨片に配じて、奥壁ぎわで鉄器(刀子=長さ約15.6cm、幅約1.5cm)が出土している。

天井、壁、床面には三種類のT.工具痕が明瞭に観察される。天井及び壁面には、整形時の工具痕と思われる幅10~15cmの断面形の痕跡が良好に見られる。T.工具痕は主に天井部の最高部より側壁、奥壁の傾斜に沿って、長さ10~15cmの削りの単位で削りおろされて、それらが一本の柱状痕を形づくり、ほぼ規則的に並列しているが、奥壁の一部では、柱状痕同志に切り合いも認められる。これに反して第2の工具痕は、前述したように、台床面と床面、特に台床面に組み馬てい状の工具痕跡を残すものである。第3の工具痕は、本横穴にのみ特有のもので、奥壁下半およびコーナー付近にみられる。クマデ状とでも形容しうる粗い刺突を主とした痕跡である。これはいかにもえぐりとったという感じのするもので、えぐりの幅は平均7~8cm、えぐりの角度は40~50°である。円形の刺突は径1cm内外の円形の先尖りの形状を呈している。刺突の単位は3本から4本である(第23図II a)。なお、天井部中央には径約15cmの円形の範囲に、えぐりこまれたような箇所がある。削りは粗く、断面形も不整である。

〈玄門〉 玄門は玄室の正面に位置し、玄室との接続部で2~3cmの段落を示す。奥行65cm、幅80cmを測る。立面形はアーチ型を示す。高さは玄室前壁との接点で90cm、玄門入口との接点で80cmを測り、床面はほぼ半坦であるが、犬井部は人口方向にやや傾斜している。床面中央、中軸よりやや右側に傾いて、長さ75cm、幅約15cm、深さ約4cmの排水溝と思われる溝が、玄門入口の閉塞溝に連している。玄門の両側壁の上半部は、ほぼ左右対称にえぐりこまれた状況を示す。この部分には工具痕はみられず、滑らかな面をなしている。天井部、壁には、玄室とはほぼ同じ単位、方向の「整形」のT.工具痕が鮮明にみられる。玄門入口部の床面に中軸に直交して閉塞用の溝(長さ1.35m、幅8cm、深さ4cm)がつくられており、その上に閉塞石が認められた。閉塞石は長さ10~30cmの河原石で、閉塞用溝から前方約80cmの範囲に3~4段(高さ約60cm程度)に重なって認められたが、重なりの状況、後述する遺物の出土状況などから少くとも閉塞当初の積石上部が崩壊している状況と思われる。

〈通道〉 平面形は奥行2.8mの逆L字形的なプランを示す。即ち、幅は玄門入口部分では1.35mを測るが、通道入口では1.0mを測り、入口方向にややすばまる。立面形はアーチ型を示す。天井部は玄門につづく約10cmの部分しか完存していないが、完存部分での高さは1.35mを測る。通道部前端は玄門となっている。幅は1.35mを測る。閉塞施設は認められなかった。前壁部は、最大残存長約90cmを測る。

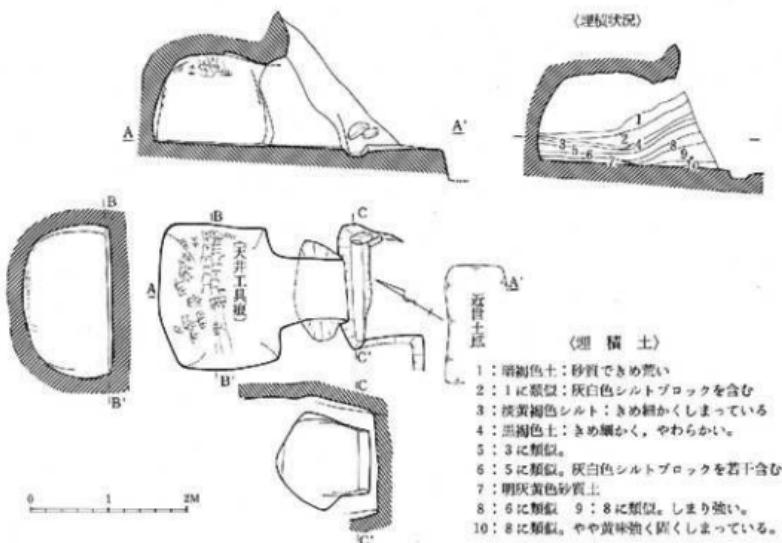
〈遺物〉 土師器2点、須恵器横盆、平盤各1点、長甕2点出土した。

〈出土状況〉 前底部左側では、床面上に厚さ約20cmほど堆積するにぶい黄褐色砂質シルト中

より土師器壺（内面黒色処理）の完形品が逆位で出土している。玄門人口の閉塞石直前床面では、須恵器横竈、平瓶そして土師器壺（内面黒色処理・ロクロ不使用）の完形品が互いに接して発見された。平瓶は正位置、土師器壺は閉塞石に接した部位に、恐らく閉塞石の落下もしくはズレによると思われるヒビ割れをつくり、平瓶に若干のりあげ傾いている。横竈は転倒し、恐らくその時の衝撃によるのであろうが平瓶の頸部を折っており、また底部にも大きく割れを生じている。しかし、いずれも損傷部位が本体より離れていない。このような出土状況は、少くとも三者が同時に埋没した可能性を強めている。玄室の床面をおおう褐色粘質土（厚さ約1mm）の上面では、長頸壺2点（1点は口縁部破損）が出土している。断面図に投影した長頸壺は、体部が粘質土面に接しているのにもかかわらず、口縁部は粘質土面に接しておらず、地山に由来する流入土と共に移動、もしくは流入土によって転倒した可能性を示している。台床部に於ては、前述したように薄くおおった褐色粘質土の上面で人骨と共に鉄器（刃子）が出土している。

#### f. 6号墳（第11図、写真23）

崖の中央部付近で発見された。この横穴は狭道および玄門の遺存状況が悪く、古くから崩壊してしまったものらしく、内部には厚い埋積土が見られた。埋積土の厚さは玄室において35~



第11図 6号墳実測図

40cm、玄門部で最高95cmで、これらは後世の擾乱流入上ではなく、ほとんど基盤岩層の崩落土(シルト)を主成分とするもので、地層中に何らかの生活面の形跡は全く見られなかった。平面的な遺存範囲は上軸の長さにして3.2mである。主軸方向はNW32°である。

〈玄室〉 平面形は奥壁がふくらみをもった隅丸方形である。幅1.85m×奥行1.45mである。立面形はアーチ形で高さは最高1.15mである。玄門部は玄門よりで崩落が認められる。中央部から奥壁よりの部分は保存がよく工具痕が観察できる。幅10cm前後と6cm前後の2種類あり、前者が天井部中央や奥壁中央部にかけてゆったりとした感じの削り方なのに対し、後者は各側壁のコーナー方向に向けて細かく施されている。奥壁および側壁の下半部にも崩落が認められた。床面および側壁では工具痕を観察することはほとんどできなかった。床面はほとんど平坦で奥壁から入口方向にかけてゆるく傾斜している。台床や溝はない。

〈玄門〉 玄門は玄室入口のほぼ中央部にとりつく。幅80cm、奥行85cmほどで、崩落が著しいため立面形は定かでないが、おおむねアーチ形を呈するものであろう。床面は玄室から連続していて平坦である。

〈羨道〉 羨道は、上半部が完全に崩落しており、立面形は判定できない。平面的に見れば、軸線は玄室のそれと一致する。遺存していたのは玄門人口から80cmまでである。幅は玄門人口部分で1.35mである。玄門入口前に幅30cm、深さ6cmほどの浅い溝がある。

〈遺物〉 出土遺物は全く発見されなかった。

#### g. 7号墳(第12図、写真24~27)

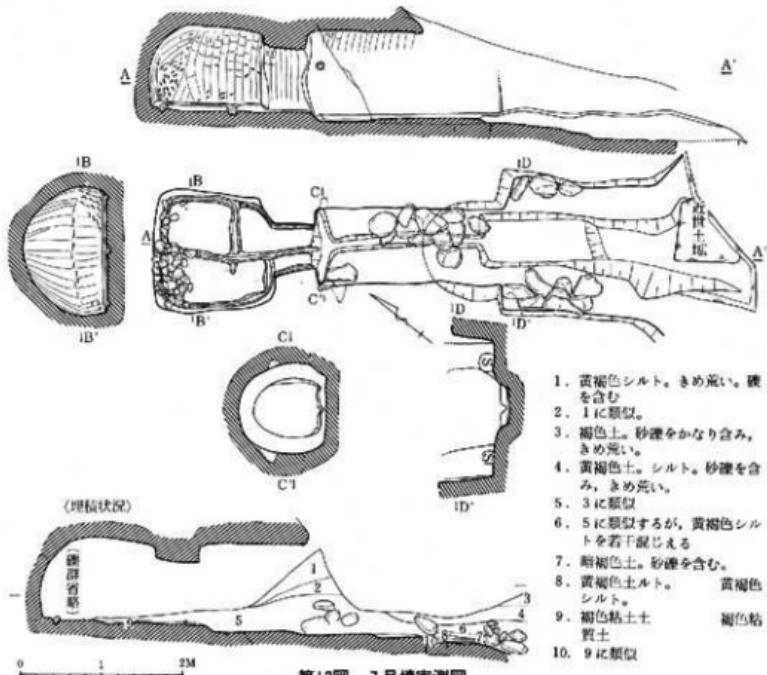
この横穴は今回調査の横穴中では、西から7番目、ほぼ中央付近に位置した所で発見された。しかし、その発見部位は最も低く、床面レベルは、全体の平均よりも70cm前後低くなっている。これとレベル的に並行する横穴は他には見られない。つまり、この横穴の埋没度は極めて深く、從ってまた保存状況も極めて良好であった。横穴自体の大きさとしては全体の中でも小型の部類に属するものだが、玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部まで良好に残存し、遺存範囲は、軸長にして6.2mに達した。なお、軸線方向はNW40°である。埋積土は羨門部付近で最も厚く約1mで、内部にいくに従い薄くなり、玄室奥半部には埋積土は見られない。

〈玄室〉 玄室の平面形は奥壁幅1.45m、前壁幅1.3m、奥行1.5mの隅丸方形である。立面形はアーチ形で、高さは1.05mである。床面はほぼ平坦で、台床は見られない。ここで注目すべきなのは排水溝の配置で、玄室周壁沿いをめぐるもののはかに、中央部を縱断するものと右半分を横断するものとがあり、あたかも玄室を3分するかの如き配置形態をとっている。溝幅は6~10cm、深さは3~4cmの断面U字形を呈する。この横穴では、特に目立ったクラックはなく、從ってこれらの溝は1、4号墳などの場合のように、クラックを意識した配置というよりは、やはり、玄室内の区分を意図したものと見る方がよいだろう。なお、奥壁沿いには50個ほ

どの小さな玉石が集積されている状況が観察された。<sup>13)</sup> 玉石の大きさは5~15cmでごく一般的な河原石である。玉石自体には、特に資料的な所見は認められなかった。これらの玉石は、その大きさや位置から見て閉塞石が崩落したものとは考えられず、何らかの意図をもって人為的に集積されたと見るべきである。その集積時期については、溝が埋まつた上に石が乗っている点などから、横穴築造当初でなく、ある一定時期をおいて後のことであろう。

整形工具の痕跡は床面を除き、壁面、天井部の全面にわたって認められた。工具は質的に2種類のものがある。一つは、幅10cm前後の一定方向に一定間隔で施されたもの、もう一つは、幅4~5cmの粗い削り痕をとどめるものである。前者はほぼ全体にわたって見られ、これは、最終的な整形の為の工具痕であろう。後者は主に奥壁下部の両隅付近に多く認められる。5号墳などでもよく見られた、最終整形前の粗削り工具の痕跡であろう。つまり、玄室のコーナー付近では、最終整形の段階の工具が十分にいき届かず、粗削りの工具痕が残ったということになるのではないか。

（玄門） 平面形は玄室入口部分の幅が65cm、玄門入口での幅55cm、奥行55cmで、玄室のはば



第12図 7号墳実測図

中央部にとりつく。立面形はアーチ形で、高さは約80cmである。床面は玄室から連続するが、側壁沿いおよび中央部に玄室からの溝が3本ある。天井部および側壁にはやはり幅6cm前後の整形工具痕が、主軸と直交する方向に一定間隔で施されている。

（羨道） 羨道は、今回調査の横穴の中では最も保存のよい方で天井部の崩落が見られたのは全体の3分の1以下であった。平面形は幅95cm、奥行は2.3mほどで、他の横穴において、玄門入口から羨門部付近にいくにつれ幅が狭くなる傾向が強かったに対し、ほとんど同じ幅であった。立面形は玄門同様のアーチ形で、高さは1.1mである。床面は玄門部から8cmほど下がっている。玄門入口の部分には、幅15~20cm、深さ2~3cmの浅い溝があり、そこから連続して、羨道の中央部を前庭方向に向けて、幅20cm、深さ6~7cmの溝が続いている。また、玄門入口前の右側壁部分において、床面から高さ65cm付近で横方向に円形の穴が深さ13cmくらいにくりこまれている部分が見られた。左側壁部分にも同様の深さの大きな凹みが見られたので、対になっていたものと思われる。これらは、いわゆる門穴といわれているものであろう。羨道部は、玄室、玄門に比べて、側壁部分の磨滅、崩落が目立ち、工具痕の形跡はよく観察できなかったが、天井部には工具痕が残り、幅6cmほどの一定間隔の工具痕が、軸線と直交する方向に施されているのが認められた。なお、羨道の入口よりの部分には、径30cmほどの羨門の閉塞石と思われる河原石が10数個ほど流入しているのが見られた。

（羨門および前庭） 羨門および前庭部では天井部は検出されなかった。平面形は幅1.65m、残存している奥行は1.9m、残存する高さは50~80cmである。床面中央には、羨道部から連続してくる幅65cm、深さ15~25cmほどの溝が見られる。この溝は玄室一羨道一前庭を通して一連のものである。なお、羨門両脇にはそれぞれ数個ずつ、径20~30cmほどの閉塞石の残存が認められた。

（遺物の出土状況） 出土遺物はロクロ不使用、丸底の内黒土師器2点（ほぼ完形）で、いずれも前庭部溝中におちこんだような状況で発見されている。

#### h. 8号墳（第13、14図、写真28~32）

（位置） 8号墳は崖中央からやや東よりに位置する。この横穴は隣接する7号墳とは4.2m、9号墳とは4.5m離れており（軸線間の距離）、しかも、いずれの横穴とも高低差が甚だしく、従って全体の横穴配置の中では、孤立した感じの配置になっている。

（確認状況） この横穴は、羨道部が玄門入口から60cm前方付近で天井部が崩壊しており、その付近を中心として厚い埋積土が見られた。埋積土の厚さは最高1.4mで、玄門、玄室へ行くに従い薄くなり、玄室奥壁付近にはほとんど埋積土は見られない。埋積土上は、他の横穴に見られると同様、基盤層の風化崩落土を中心とした自然埋積土である。なお、床面全体にわたって、暗灰褐色粘土が、厚さ2cm前後にわたって、貼りついている状況が確認されている。埋積土層中

には使用面もしくは生活面の形跡は見られなかった。全般的に各部の保存状況は良好である。現存する主軸の全長は6.7mで、方向はNW47°である。

（玄室） 平面形は、幅2.55m、奥行2.0mの長方形で、右側壁がいくぶんふくらみをもつ。立面形は、4号墳同様切妻造りの家型で、天井部と側壁の境界部に軒回りの線が刻みこまれている。床面から天井棟までの高さは1.7mである。屋根の線の表示の上で4号墳と異なるのは、この横穴では屋根の束柱の表示が両側壁（妻の部分）に見られる点で、全体的な線の印象も、4号墳よりもくっきりと、また整然とした感じをもっている。

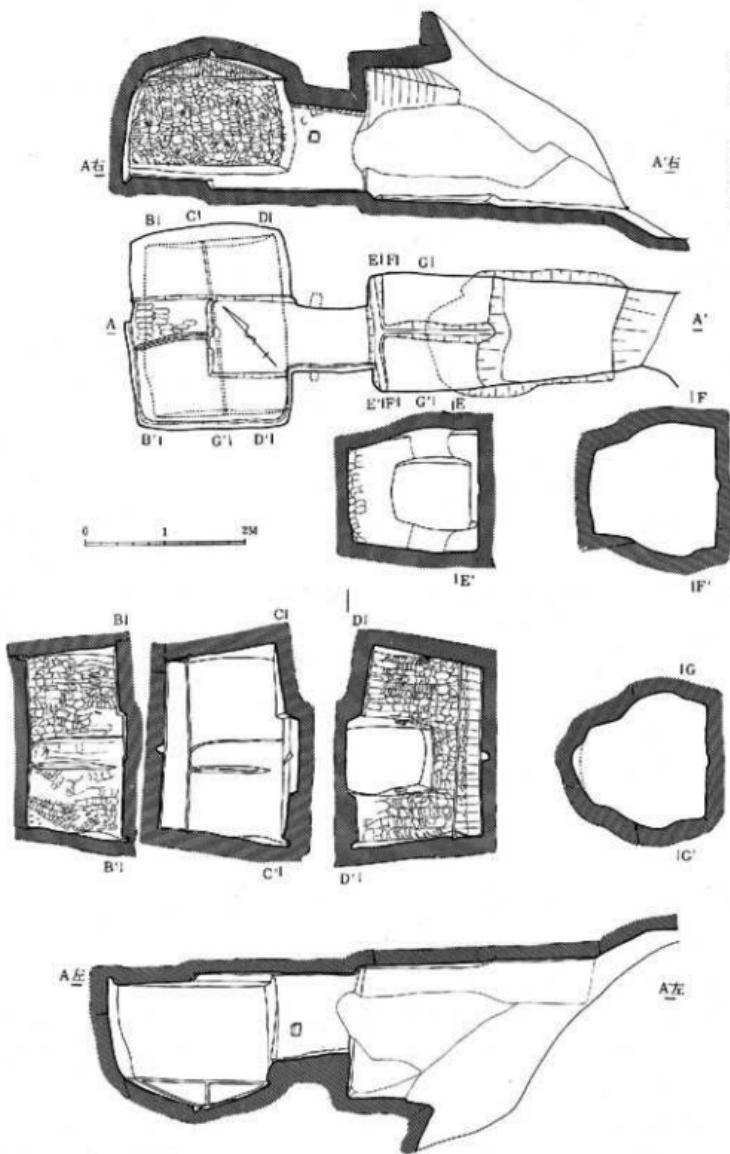
台床は、4号墳同様中央部床面をとり囲むような、いわゆるコの字形の配置であるが、大きく見れば2つに区分できる。すなわち、右側壁沿いの一段高い台床と、奥壁左半分から左側壁沿いにかけて「」形に曲がる台床とにわけられる。前者は、床面からの高さ18cm、後者は、同じく10cmである。いずれにも縁はない。後者の台床の周壁沿いには、幅10cm、深さ8cmほどの断面U字形の溝がめぐり、玄門左側壁沿いから羨道部に至っている。この溝は、玄室の奥壁沿い左半分と左側壁沿いにのみ見られ、玄室の右半分には溝は全く見られない。

整形工具の痕跡は、床面の一部を含め天井および壁面のほぼ全面にわたって、きわめて明瞭に観察することができた。それによれば、工具痕の種類には概して2種ある。一つは、最終整形用の工具痕であり、他は、最終整形前の荒削りの工具痕である。前者には、さらに幅12cmほどの幅広のものと、幅8cm前後の幅の狭いものの2種類が見られた。整形工具痕は一定の間隔で一定方向に向かって施されている。天井部では、中央の棟の線から軒先方向へ、壁面では、上から下へである。ただ、壁面下部や壁のコーナー付近では、粗削り工具痕が消えずに残っている部分が多く見られた。

また、右側壁に特に入念な整形の痕跡が見られたに対し、左側壁では、荒削り工具痕の残存部分が多く見られ、右側壁に比し入念さを欠いている感じが伺われた。なお、荒削り工具痕のでき具合を具体的に観察すると、整形工具痕が工具の刃を一定方向にすべらせる感じの削り方をしているに対し、対象面に直角もし

第13図  
8号墳埋積状況図・天井工具痕図





くは鋭角的に打ちつける感じの削り方だったと思われる。なお、天井部は、全体の整形の後で屋根中央の棟線の表示のために軸線と直交する方向に幅広の工具痕を入れ、さらに、その頂点の部分は、刻線でもって棟線の表示を行っている。また、棟の中央部には直径10cm、深さ8cmほどの円形の粗削りのえぐりこみが認められたが、その削り方は、他の工具痕などとは全く異質なものである。なお、奥壁左半分は、周囲沿いの溝の配置と関連して、全般的に奥行8cmほど削りこまれており、一部に剥落が認められる。

〈玄門〉 玄門は幅80cm、奥行1.1mで、右側壁沿いの台床の位置関係から、玄室の中央よりいく分左よりに偏した部分にとりついている。しかし軸線方向はほぼ一致する。立面形は、正面形が胴張り氣味の長方形を呈する方坑形で、高さは1.0~1.1mである。床面は玄室から連続しているが、左側壁沿いに、玄室左側壁沿いからの溝（幅8cm、深さ10cm）がある。壁面では玄門入口から奥へ70cm、床面から高さ70cmの両側壁にちょうど向かいあった形で一辺12cm、深さ左側が11cm、右側が17cmの、いずれも横方向にえぐりこまれた方形の坑がある。これらはいわゆる門穴と呼ばれるものであろうが、機能は不明である。天井部には、幅6cmほどの整形工具痕が、軸線と直交する方向に一定間隔で施されている。

〈狭道〉 狹道は、玄門入口での幅1.5m、最も入りでの幅1.0m、現存の奥行3.2mで、奥から入り口にかけて幅が狭くなる傾向を示している。軸線は玄室のそれとはほぼ一致する。立面形は玄門同様正面から見た形が台形の方坑状を呈する。高さは1.7mである。床面は全体的に玄門よりも5cmほど下がる。玄門入口部分に軸と直交するように幅20cm、深さ2cmの溝があり、その中央部から狭道入口方向へ向けてはほぼ直ぐに幅20cm、深さ3cmの溝が走っている。そして、玄門入口から1.6mほど前方付近で床面は3~5cmゆるやかな段状に下がっている。この下がった床面の左側壁より須恵器長柄瓶が1点、正立した状態で発見された。壁面には、床面からの高さ0.3~1.2mの範囲で深さ8cmほどの窪曲した幅広で細長いえぐりこみが両側壁に認められた。このえぐりこみは側壁上部に見られる整形工具痕を切っていることから、築造後のものと考えられる。壁面および天井部に見られた整形工具痕は、幅10cmほどで上から下に整然と施されている。

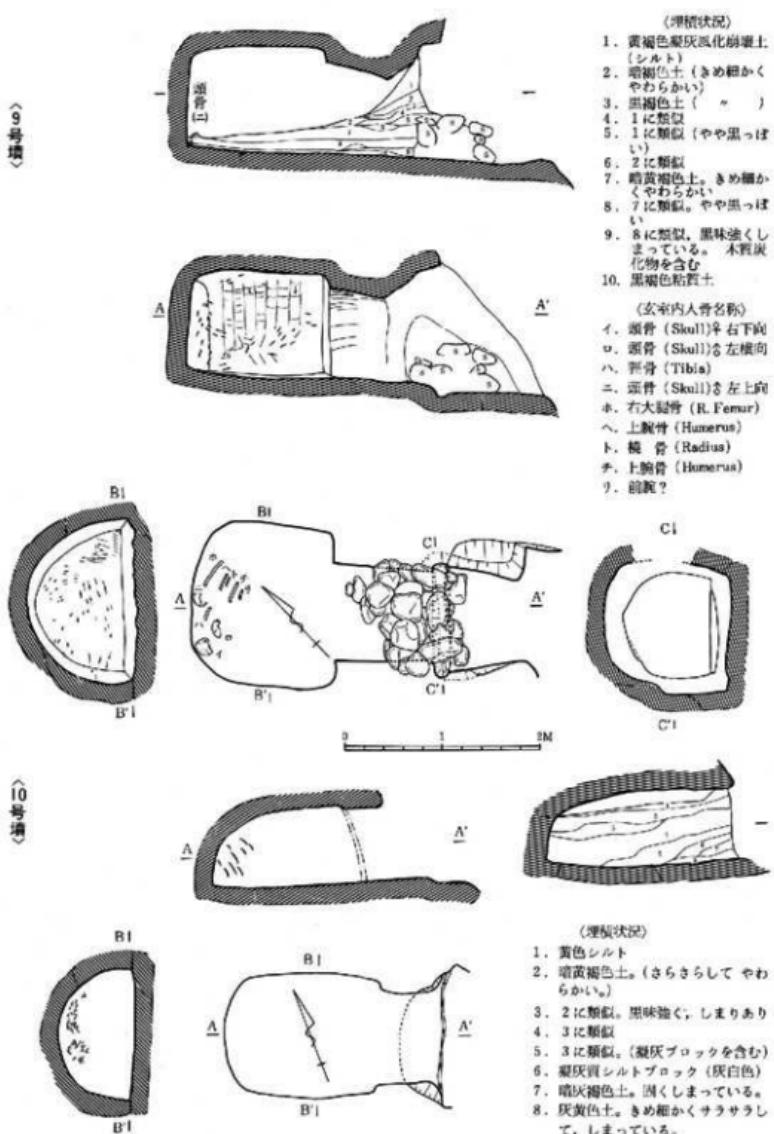
### i. 9号墳(第15図上、写真33、34)

〈位置〉 8号墳の東上方にあり今回調査の横穴中では、最上段に位置する。

〈確認状況〉 玄門入口前で天井部が崩落し、この崩落土によって、玄門入口が完全に覆われていた。埋積土は床面直上の層を除き、すべて基盤層の崩落土で、その間に使用面の形跡は見られない。埋積土の厚さは玄門入口で最高1.1m、玄室中央部で25cm、奥壁部で10cmとなっている。最下層には厚さ2~3cmの黒褐色粘土がほぼ床面の全体を一様に覆っていた。玄室内からは3体分ほどの人骨が発見されたが、それらは、この粘土層の上で発見されたものである。

9号埴

10号埴



第15図 9、10号埴実測図

また、玄門部付近では炭の混じっている部分も確認された。発見された部分の全長は3.5mであるが、この間に玄室、玄門、羨道、羨門部までが遺存しており、いわば小らんまりとまとまつた横穴ということができよう。特に注意すべきなのは、羨道の奥行きの短い点で、奥行の長さは90cmしかない。それに対して、玄門部がやや長く1mほどある。これはどうやら形態的には、羨道部の機能が退化しつつある過渡期的な横穴ということになりそうである。

〈玄室〉 平面形は幅1.65m、奥行1.5mで奥壁がややふくらみをもつ不整隅丸方形である。立面形はアーチ形で高さは1.1mである。奥壁がほぼ垂直に立ちあがって、犬井部との間に比較的明瞭な傾斜変換線を有する。しかし、側壁は上に行くに従い内傾して、天井部との間に明瞭な区分線を引くことができない。つまり、玄室の正面形はちょうど半円形を呈するのである。玄室奥壁付近、床面直上の薄い粘土層上で3体分の人間の頭骨および6点の上下肢骨片が発見された。これらは、半分以上玄室内の埋積土中にあったが、風化の度合いが進んで、骨の光沢などはなかった。ただ頭骨などは、比較的形態の崩れは少なかった。人骨の内容については、別途後述する。

台床および排水溝等の施設は確認されなかった。

整形の状況についてはやや入念さを欠いている。つまり、全般に天井、壁面とも荒削りの工具痕が多く目立ち、最終整形の為の幅広の工具痕は部分的にしか認められない。特に天井部と奥壁の稜線部分などには、意識的にこの荒削りの工具が多く用いられているようである。また、側壁下半および床面などはほとんど最終整形はされず、きわめて凹凸の激しい状態を呈している。

〈玄門〉 平面形は幅1m、奥行1mで、立面形は、玄門入口の崩落が見られるが、アーチ形を呈し、高さ90cmである。玄室と軸線は一致するが、その大きさ、高さを玄室と比較すると大差なく、玄室と玄門をはっきりと区画しようという意図がやや薄いように思える。このことは先に述べた羨道部の縮少と合わせて一つの傾向を示していると見ることができるのでないだろうか。床面は玄室から連続しているが同様に凹凸が目立つ。また閉塞石の崩落したものが相当玄門内に流入していた。また、石の下に一部木質炭化物の残片が見られたことは、閉塞板と閉塞石による閉塞の形態を暗示するように思える。

〈羨道〉 玄門入口部分での幅は1.1m、羨門部での幅0.8m、奥行90cmで入口部分が狭まる。犬井部が崩落しているので立面形の判定は困難だが、壁面の立ちあがり具合などから見ると、玄門同様アーチ形と考えられる。玄門入口との境界部分には閉塞石が高さ50cmほどまで積み重なって残存していた。本来はそれよりも高かったと考えられるが、閉塞板の窓跡とともに玄門方向に崩落したものであろう。原位置をとどめていると考えられる閉塞石の状況から当初の閉塞の状況を推定すると、延20~40cmの細長い河原石を横方向に4~5段に積みあげたものらしい。また、床面では、玄門入口との境界部分に軸と直交する方向に幅15cm、深さ4cmほどの溝

がある。また床面は全般に玄門部よりも10cm前後下がる。また壁面下半部には深さ8cmほどのゆるやかなえぐりこみが認められた。

〈その他〉 美門部は右袖の部分だけが認められたが幅は1.2mとなる。また残存する前庭部は奥行40cmしかなく、それより前方は急傾斜面となってしまっている。人骨以外に出土品は発見されなかった。

#### j. 10号墳(第15図下、写真35)

〈確認状況〉 本横穴では、玄門入口部分までが確認された範囲であり、それより前方、羨道部などは確認されなかった。もっとも、本来の奥行が浅いようでもあり、羨道部は本来もたなかつたと考えることも可能である。内部には、玄門部から玄室まで含めて、埋積土が相当に充満していた。玄門部は完全に塞がれていたが、玄室では、高さ80cmほどの内、空間として残されていたのは10~15cmである。埋積土の上成分は、主として基盤岩層の風化土であるが、埋積土の下半部3分の2ほどは固くしまっており、人為的に埋められた可能性もある。発見部分の全長は2.2mで、軸の方向はNW68°である。一応、玄室と玄門との区別はわずかにつくが、ほとんどズンドウ型の感じで、9号墳よりもさらに略式化された形態の横穴ということができる。

〈玄室〉 平面形は幅1.3m、奥行1.6mで、奥壁が張りだした隅丸長方形である。立面形は高さ80cmのドーム型である。非常に小型であり、玄門との区別がはっきりしない点などを考えあわせると、変形ドーム型とでもいべきか。床面はほぼ平坦で特に凹凸は見られない。荒削り工具の痕跡が天井部および奥壁上半付近に残存している。玄室入口部分の側壁には玄門との区別を示すわずかな稜線の形跡を残している。

〈玄門〉 幅90cm、奥行は55cmである。高さは75cmである。立面形はアーチ形である。

〈出土遺物〉 なし。

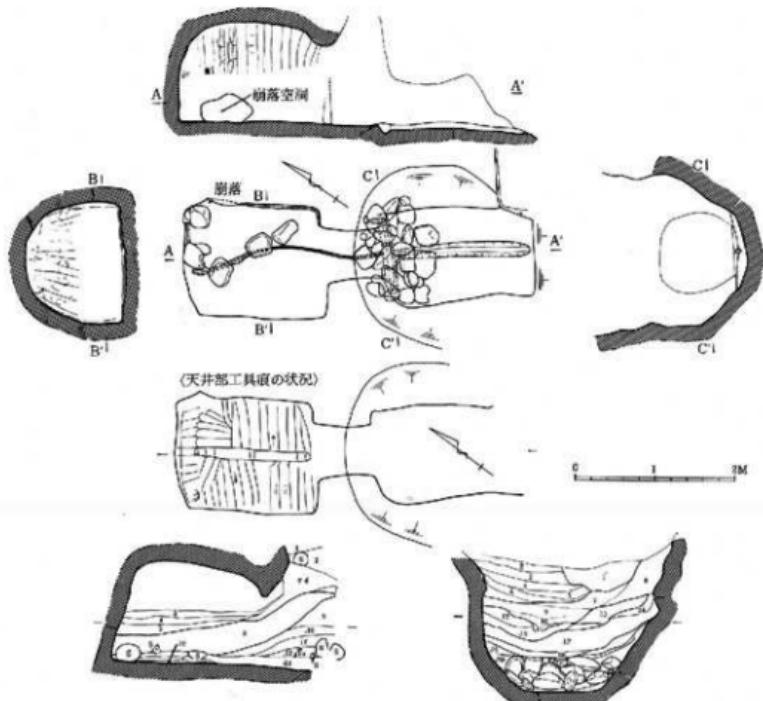
#### k. 11号墳(第16図、写真36、37)

〈位置〉 当横穴群の東部に位置する。10号と12号のはば中間に位置する。横穴確認位置での中軸間の距離は、10号とは2m、12号とは2.5mを測る。しかし、三者は互いに中軸方向が異なるために、10号とはしだいに距離をひらくが、12号とは玄室の一部で接触している。玄室入口における床面レベルは当横穴群における平均的なものである。10号より0.45m、12号より0.56m各々高い。軸線方向はNW37°30'を示す。

〈確認状況〉 埋積土を排除して後退部を確認した。流入土は玄門部をふさぎ、玄室高の約半分の高さに堆積していた。玄室、玄門、羨道部が残存し、全長は4.4mを測る。玄室、玄門、羨道の床面はなだらかに傾斜している。玄門部の大井は剥落し、羨道部の天井、側壁の大部分は

崩落している。

〈玄室〉 右壁の奥壁より下隅の部分は12号の玄室左壁と接触し、長さ40cm、高さ約35cmにわたって陥没している。平面形は縦長の長方形を示す。ただし床面のコーナーは、前壁に於て、若干の丸みをおびる。奥行は、1.8m(中軸)、幅は1.4m(中央部)を測る。立面形は天井部が若干扁平ぎみであるが、基本的にはドーム型である。最高部は中央周辺にあり、床面からの高さ1.25mを測る。玄室内の厚さ約60cmの堆積土を除去していくと、長さ約10~30cmの河原石が数個認められた。これらのの中には、床面を薄く(厚さ1~2cm)おおう明黄色粘土(地山に類似)



〈埋積状況断面図〉

- 1.2: 地山の崩落土
- 3.4.5.6.7: 黄白色シルト
- 8.9.10.11.12.13.14: 淡黄白色シルト(しまっている)
- 15: 明黄色粘土(基層の質質土?)

〈埋積状況一様断面玄門入り〉

- 1: 暗黃褐色土: きめ荒くしまっている
2. 3. 4. 5. 6: 黄白色シルト
- 7: 暗褐色土(きめ細かくしまっている)
8. 9. 10. 11: 明黃褐色土( " )
- 12: 灰黄色土( " )
- 13: 灰白色土(根灰質シルトブロック多分に含む)
14. 15. 16: 明黃褐色土(きめ細かくやややわらかい)
- 17: 13c類似
18. 19. 20: 暗灰白色土(きめ細かくしまっている)

第16図 11号墳実測図

面にのっているものもみられたが、特に配列に規則性があるわけではなく、崩落した閉塞石の流入したものと思われる。台床はなく、床面はやや凹凸あるが平坦である。溝は、中央（軸方向）と右壁沿いにつくられている。中央の軸方向に走る溝は幅4cm、深さ2cmで、奥壁ぎわより始まり、中央付近で右側に弧状に彎曲し、玄門から漢道の残存端にまで達している。右壁沿いの溝は、幅約4cm、深さ1~2cmで、奥壁付近を陥没で損失しているが、前壁側では、前壁と玄門の接点まで達している。この他、玄室奥壁右よりに幅約4cmの小溝状の凹みが認められた。工具痕は、天井および壁面の上半にみられる。下半部では噴面が剥落しており、痕跡は認められない。工具痕は、鋭い刃痕を残す「キザミ」タイプのものが、奥壁上半部や、天井から壁にかけての傾斜変換部にみられ、幅10~15cm、断面波型の「整形」工具痕は、奥壁、天井、側壁に認められる。奥壁では柱状に並ぶ整形工具痕中に不定方向にきざみこまれた長さ4~8cmの直線および、やや弯曲した刃痕が残存している。天井部は、一部に粗い工具痕がみられる他、概して、壁における整形工具痕の延長方向に痕跡が走るが、中軸線上に1本、幅約13cm、長さ1.45mにわたって、周辺工具痕を切る、明瞭な整形工具痕が認められるのが特徴的である。

（玄門） 玄門は、玄室正面やや右よりに配置される。奥行は75cm、幅は中央で60cm、玄室・漢道との接点で約70cmと両接続部でやや広がりをみせる。立面形は、大井部が剥落しているがアーチ型と推定される。高さは、同じ理由で95cm以内と推定するにとどまる。床面には玄室から走る排水溝がある。壁は天井部同様剥落が著しい。玄門入口付近には閉塞石が認められた。閉塞石は長径10~35cmの河原石で、玄門の前半部から入口にかけて、2~3個ずつ重なる状況を示す。このような石の分布及び石と石のすき間の広さは、当初の閉塞の大部分が崩落している事を示している。又堆積土の縦断面は、これらの閉塞石が、床面上ではなく、その上に堆積した淡黄白色砂質シルト層の上にのっている事を示している。この閉塞石をとり除くと、中軸に直交する、幅約12cm、長さ1m、深さ8cm（玄門床面より）の閉塞川の溝が認められた。

（漢道） 漢道部は、残存する長さ1.9m、幅1.05~1.15mを測る。立面形は、側壁の立ちあがりからアーチ型を推定するにとどまる。玄室より走る排水溝は、上縁幅を約20cmに広げて漢道部残存端部に至っている。

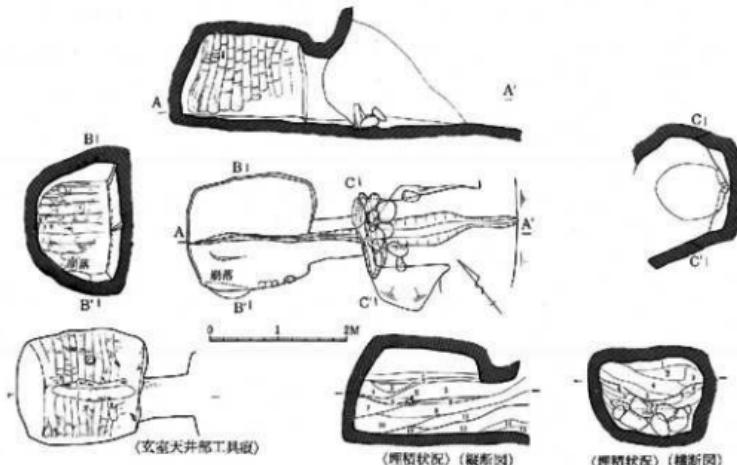
### I. 12号墳(第17図、写真36、38)

（位置） 11号と玄室左壁で接続している横穴である。東側に隣接する13号との中軸間距離は、約2.5mを測る。玄門入口の床面レベルは、当横穴群の中で7号に次いで低く、7号と9号を除く一連の横穴の中では最も低い位置の横穴である。隣接する横穴との比高は、11号より0.56m、13号より0.23m各々低い。軸線の方向はNW52°30'を示す。

（確認状況） 堆積土を排除して漢道部を確認した。玄室は、流入土で玄室高の3分の2まで

埋まっていた。玄室から残存する羨道の端までの全長は4.7mを測る。羨道部の天井は崩落している。

(玄室) 左側壁での奥壁付近の床面からの高さ約30~60cmにかけての部分は、11号との接觸により穴があき、11号と連結している。平面形は胴張りぎみの長方形を示す。胴の張りは、右壁では前壁よりに、左壁では奥壁よりに、最大屈曲点があり、全体的に均整がとれていない。奥行1.85m(中軸)、幅1.65m(中央)を測る。立面形は、奥壁がやや丸みをおびて前傾していることから変形アーチ型とする。高さは中央部で1.25mを測る。台床はない。床面はほぼ平坦で左壁隅にウロコ状の工具痕が若干観察される。溝は、壁沿いに奥壁から右壁そして右袖前壁沿いをめぐる溝(幅3~4cm、深さ約3cm)と奥壁付近から中央を軸方向に走り羨道残存端まで達する長い溝(幅5~10cm、深さ約3cm)がつくられている。工具痕は、天井、各壁の全体に幅8~15cmの「整形」工具痕が柱状に整然と認められる他、粗削りの際のものと思われる鋭い刃痕が、天井から奥壁及び天井から前壁にかけて傾斜が変換する部位に残存しているのが特徴的である。整形工具痕を観察すると、特に痕跡の明瞭な各壁面では、柱状痕は約5~7cm毎に鋭い刃痕の段で区別でき、更にその中に、刃こぼれを想定させる幅1mm前後の微細な縱じまを見ることがある。次に工具の方向をみると、基本的には上から下へ壁面に沿い展開している。ただし天井部の中央には、横方向の整形工具痕を切って長軸方向に、幅12~18cm、長さ1.2m



1. 2. 3: 明黄褐色シルト  
4. 5: 黄褐色土層(きめ細かくしまっている)(=横断図1)  
6: 明黄褐色シルト  
この間の下に薄く(1cm程度)黄色粘土層はある。  
Sは凝灰岩片
7. 8. 6: 類似  
9: 暗黄褐色土(=横断図2)  
10. 11. 12: 明黄褐色シルト: しまっている(=横断図4)  
13. 14. 15: 灰褐色土: 固くしまっている(=横断図7.9.10)

第17図 12号埴輪測図

にわたり明瞭な1本の整形工具痕が認められる。これは、隣接する11号、4号（横方向）と共に天井部における整形工具痕の特徴的表現である。

〈玄門〉 玄室正面のやや左寄りに位置する。奥行は70cm、幅は60cmを測る。立面形はアーチ型を示す。高さは95cm（玄室との接続部）を測る。玄門入口には、閉塞用の河原石（長径20~35cm）の一部が残存していた。この河原石を除去して中軸に直交する閉塞用溝（幅約25cm、深さ約5cm、長さ1.25m）を検出した。

〈漢道〉 現長2.35m、幅1.1mを測る。立面形は、天井部が崩落しているため、壁の立ち上がりからアーチ型を推定するにとどまる。

〈遺物〉 なし

#### m. 13号墳(第18図上、写真39)

〈位置〉 当横穴群の東端部、12号と14号のほぼ中間に位置する。玄室人口床面のレベルは、当横穴群の平均的数値を示す。中軸方向は隣接する14号に近似し、NW71°20'を示す。

〈確認状況〉 埋積土を排除して確認。内部は流入土が充満していた。玄室と玄門の区別が判然としない点で当横穴群唯一の横穴で、現存長は2.0m、幅は中央部で80cmの小さなものである。床面はなだらかに入口方向に傾斜する。天井部は奥壁から約60cm前方まで残存するのみである。平面形は放物線形プラン、立面形は変型ドーム型を示す。高さは85cmを測る。平面形、立面形の輪郭線は、きわめて粗い築成時の工具痕によって凹凸が著しい。台床はない。大井、壁面には中軸方向の粗い工具痕が顕著である。この痕跡には、「整形」工具痕のような規則性はみられず、主に築成の際のものと思われる。工具の幅は7cm前後で、痕跡は特に大井部と各壁との最も屈曲する部分に顕著である。又奥壁巾火付近に集中して、この工具が壁に対して直角ないし鋭角的に加筆された工具刃の痕跡が認められる。

〈遺物〉 なし

#### n. 14号墳(第18図下、写真40、41)

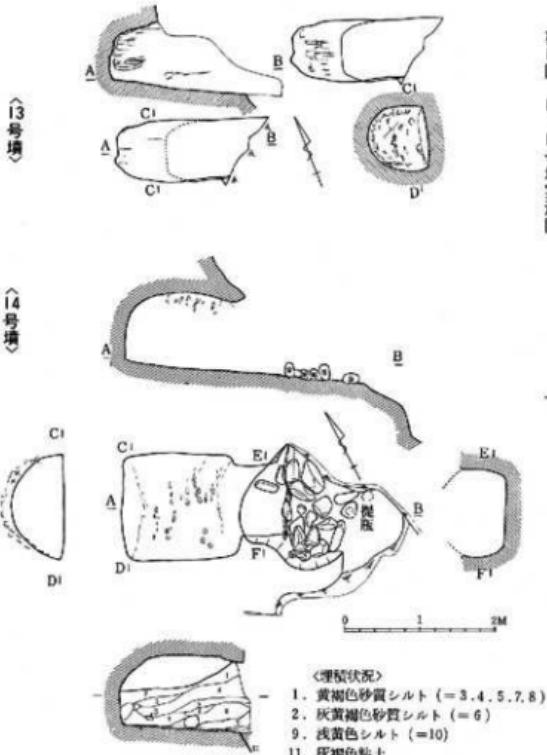
〈位置〉 今回発掘調査した中で最も東端、広瀬川の堤防上の道路沿いにある。玄門入口のレベルは当横穴群の平均値に近い。

〈確認状況〉 埋積土を除去して、漢道部を確認した。玄門部は流入土が充満し、ゆるやかに奥方向にその厚さを減ずるが、なお玄室内でその高さの2分の1に達する。玄室、玄門および漢道の一部が遺存し、全長は3.2mを測る。床面は、ほぼ一様に入口方向に傾斜する。玄門の大部分及び漢道の天井部は崩落している。

〈玄室〉 平面形は隅丸方形であり、やや縦長である。奥行は1.6m、幅は1.4mを測る。立面形はアーチ型である。ただし天井部はゆるやかにやや丸みをおびる。高さは1.0m（中央部）を

測る。台床はない。床面は、厚さ1cm未満の灰褐色の粘質土でおおわれている。天井部、壁の上半部には13号同様粗い工具痕が認められる。この工具痕は、幅約6cmの刀を持つ点で13号とはほぼ同じであるが、13号のそれより更に急角度で、直角もしくはそれに近い角度で加筆している点が異なる。又、この痕跡は、天井と奥壁の傾斜変換部に顕著であり、天井と前壁の傾斜変換部にもみられ、天井部にも、かなり分散的に分布する。ただし、これらの工具の刃先痕は、ほとんど中軸に直交している。

第13  
14  
号  
号  
填  
埋  
測  
測



る。つまり中軸に平行して工具が使われている。このような工具痕の在り方は、基本的には、隣接する13号や10号とも共通するものである。

や10号とも共通するものである。

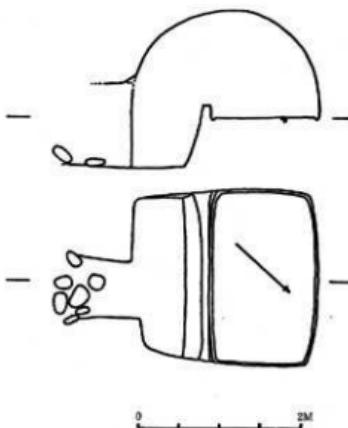
**(玄門)** 玄室正面のいくぶん右寄りに位置し、奥行60cm、幅は93cmと当横穴群中最も広い。立面形は、壁の立ち上がりからアーチ型と推定される。玄門入口には、中軸にはば直交して、幅約8cm、深さ約3cm、長さ1.3mの閉塞用溝がつくられている。又入口付近には、閉塞用の河原石の一部が残存していた。

**(狭道)** この河原石積の直前、床面上で須恵器の提瓶の完正品と長頸瓶の一括破片が出土している。狭道は現存長1.1m、幅は1.45mを測る。天井部側壁の崩壊により立面形は不明である。

### ○、15号墳<sup>18</sup> (第19図)

昭和28年暮れに、道路工事による崖面切削の際に発見された横穴である。当時は、この横穴が1基のみ発見されただけであったが、この発見により、宗禅寺前面の崖面全体に横穴が存在する可能性があると判断され、その後、仙台市文化財分布図に、保護対象物件C-033として公式に登録され、そして、今回の調査のいとぐちとなったものである。

今回の調査の結果、本横穴が全体の中でもっとも東側つまり広瀬川より近く築造された横穴であることが判明した。この横穴は、発見時にもすでにかなりの損壊を受けていた模様だが、現在では、ほとんどその原形をとどめず、切削された崖面のわずかなくぼみ状となっており、実測図によってその状況を推察するのみである。「善応寺横穴群調査報告書」に掲載された実測図によれば、発見されたのは、玄室、玄門部およびその閉塞石のみで、羨道は発見されなかった。玄室は、一边2.2mほどの方形で、立面形は高さ1.9mほどのドーム型を呈している。奥壁沿いには、幅2.2m×奥行1.5m、高さ50cmほどの、広く高い有縁台床が造られている。この様な台床は、本横穴群中では他に全く見当らず、その意味ではきわめて異質な横穴である。台床のまわりには溝がめぐらされている。玄門部は、奥行、幅とも60cm前後、高さは1mほどである。玄門入口に閉塞石の残骸が数個ちらばっている。工具痕の状態などは全く不明であり、また、出土品は全く発見されなかったとのことである。なお、横穴の軸線方向はNW42°ほどになっている。



第19図 15号墳実測図(「善応寺横穴群調査報告書」より転載)

### (3) 出土遺物

今回の調査で出土した人工遺物は総点数22点に及ぶ。そのうち、須恵器が13点（内、完形もしくはそれに近いもの7点）、土師器が8点（完形5点）、鉄製刀子1点である。その他、人骨4体分以上が出土した。

#### a. 須恵器 (第20、21図、写真42、43)

須恵器の内訳は、長頸壺8点（内、完形もしくはそれに近いもの4点）、長頸瓶1点、横甕、

提瓶、平瓶各1点（以上、いずれも完形）、壺？破片1点などである。

#### ① 長頸壺（第20、21図、写真42）

1と2は人骨を出土した5号墳玄室の右床の手前で、いずれも横転した状態で出土している。2は口縁部の3分の2ほどが欠失しているが、全形の形態復原は可能である。色調は灰白色で、焼成良好、また胎土は精良で緻密である。1は全くの完形品であるが、器表の色調は対照的に全体が黒味をおびている。しかし、一部剥落した部分の色調は灰白色で、胎土には砂粒などを多く含み、ややきめ荒い。焼成は2に比較すると弱く、やややわらかい感触がある。形態的には両者とも低い高台をつけたそろばん玉形の体部の上に、細長くラッパ状に開く口縁部をのせているが、ここで両者に共通して特徴的のは、口縁部直下に低い段をめぐらしていることである。体部の上半、つまり肩部と下半部の境には一本の沈線がめぐらしている。体部の下半および底部には、いずれも同軸ヘラ削り調整が施されている。大きさは、2が全高27.5cm、口縁部直徑13cm、体部との接合部で径6.5cm、口頸部の高さ12.5cm、体部の最大径17.5cmである。また底部には高台がつくが、この高台の高さよりも底面の突出が大きい為不安定さを免れず、この高台は、きわめて形式的な退化した形態のものといつていいだろう。1は、2よりは全体的にひとまわり小さく、全高24cm、口縁部直徑10.5cm、体部との接合部で径5.0cm、口頸部の高さ11.5cm、体部の最大径は18.0cmで、2に比べると体部径が大きく、全体に安定感がある。また、肩部縁辺の直上部には幅1cmほどの帯状の範囲に波状の櫛目沈線が施されている。器厚は、両者とも口頸部で5mm前後である。

4は、8号墳羨道部床面直上で、正立した状態で発見されたものである。口縁部が欠落していて不明である。色調は灰白色で、肩部には暗緑色のまだら状の自然釉が全面に付着している。焼成は良好であり、胎土はきわめて精良で、水ごししたかと思われるようである。形態は、底部に低い高台がつき、体部は肩部との間に明確な稜線を持たず、全般に丸味のあるもので、細く長い口頸部がつく。色調、胎土、形態を総合して、きわめて優美な印象のあるものである。体部の最大直徑は15.9cm、底部の直徑8.3cm、口頸部は、直徑8.0~4.3cm、高さ9.0cmで、底部から口縁部までの現高は20.2cmである。器厚は全般に薄手で口縁部で0.6cm前後、体部は不明である。体部の成形は、おそらく巻き上げであろう。全面にロクロによるナデ調整が、きわめて急入りに施されている。

3と5は、各々4号墳の羨道右側壁沿いおよび前庭右側で発見されたものである。3はほぼ完形品だが、5は口頸部を完全に欠いている。3は色調青灰色で光沢はない。胎土は精良でいく分砂を含んだ感じで、ややザラザラした感じは残るが、焼成はきわめて良好で、器質は非常に堅緻である。色調も全体に均一で全くムラがない。形態は、低い高台の上に、肩部と体部下半部の境に角張った明瞭な稜線のついた体部がのり、その上に体部とほぼ同じ高さの口頸部がのる。全体の器高は27.6cm、口縁部直徑11.8cm、体部との接合部で5.9cm、口頸部の高さ13.0cm、

体部最大径17.2cmである。器厚は0.5cmである。5は、全般に8号墳出土のものによく類似したタイプで、体部が丸味をおび肩部に自然釉がかかり、色調は灰白色である。体部直径は16.6cmで現高は13.2cmである。2号墳からは破片が3点出土した。うち2点は羨道入口付近、もう1点は玄門からの出土だが、いずれも床面直上からの発見ではなく、埋土の上部から出土したものである。6は、口頸部と肩部のみ発見されたが、体部下半と肩部との境に角張った稜線があるので、4号墳出土の3と同じタイプであろう。肩部には薄緑色の釉がほぼ全面に付着している。他の2点はそれぞれ口頸部と底部の破片であるが、底部片は低い高台がつき、体部下半は、丸味をおびた立ちあがりで、回転削り調整が施されている。口頸部は口縁部を欠いているが、体部との接合部の直径5.5cmで粘土をしばった痕跡が内外面とも明瞭である。8は、調査着手前に付近の墓地から表探したものである。口頸部が完全に欠損している他、底部の高台も剥離して失われていた。体部は全体に丸味があり、全く肩部と体部下半との境がない。外面は、風化磨耗が激しく、調整の痕跡も一部剥落して見えない部分があるが、体部上半はロクロナデ調整、下半は回転削り調整が施されている。体部上半には自然釉の付着した形跡が認められる。

以上を総合した上で、共通事項をあげてみると、(1)ほとんどが低い高台をもつ、(2)調整面では、口頸部および体部上半にナデ調整、体部下半および底部に回転削り調整が施されている。(3)底部の切り離しは回転ヘラキリによったらしいなどがあげられる。一方、器形の上でのいくつかの類型化も可能であろう。すなわち、④口縁部直下に段をめぐらし、体部下半と肩部の境に沈線がめぐる(1、2)。⑤口縁部直下に段を有せず、体部下半と肩部との境が角張る(3、6)。⑥口縁部は④と同じだが、体部は全体に丸味をおび、肩部との境に明確な稜線を引くことができない(4、5、8)などである。

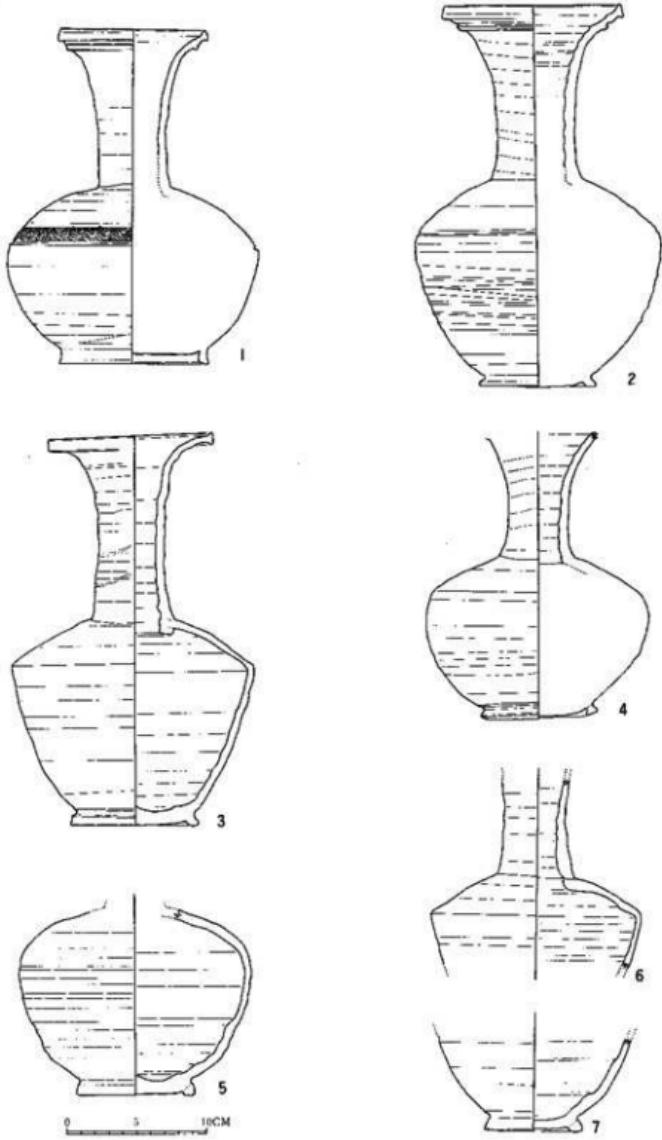
### ②. 長頸瓶(第21図9)

14号墳羨道部の床面直上で発見された。口頸部および体部の片半部を欠いている。全体に器面の風化、磨耗度が著しく、外面の調整を判定するのが困難なほどである。しかも、それが長い間シルト質埋積層の中にあって、シルト分が磨滅した器面に付着浸透して、全般に外面の色調は内面が黒ずんだ灰色であるとの対照的に黄白色的な色あいとなっている。器形は、ほぼ球形の体部の一側に口頸部がとりついたもので、体部の直径は14.0cm、幅は14.5cmと推定される。外面には自然釉が付着していた形跡がわずかながら認められる。おそらく善應寺横穴23号墳出土のもの<sup>16</sup>と類似したタイプのものであろう。内面は、全体に口頸部と同方向のロクロ回転ナデ調整が施されている。

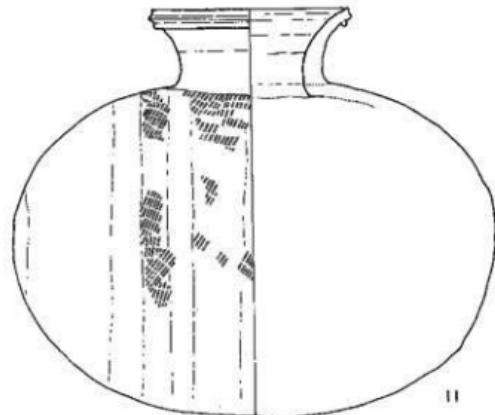
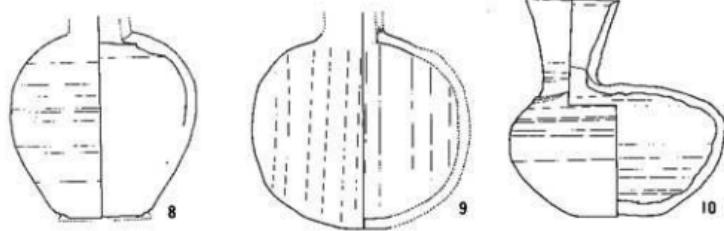
### ③. 橫甕(第21図11、写真42-5)

5号墳羨道部、閉塞石手前のほぼ床面直上で、平瓶、土師器坏(内里、ロクロ不使用)などと一括した状態で発見された。発見時は、体部の長軸が横穴の軸方向に向き、口頸部は羨道側壁方向に倒れ、全体的に隣接する平瓶の上に倒れかかり、ために平瓶の口頸部は折れていた。

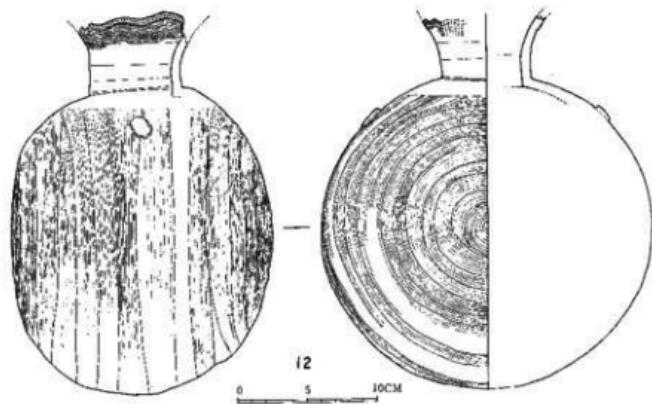
第20図 痘瘍器実測図(1~長頸壺)



第21圖 須惠器実測図(2)



8 長頸型  
9 長頸脇  
10 平脇  
11 横並  
12 提瓶



口縁部が一部破損欠失しているほかは全くの完形品である。色調は灰褐色で、焼成は良好できわめて固い感じのするものである。全体に赤味が強い。形態は、長さ34.5cm、直径23.7cmの、両側端が自然に弧を描く反球形の一側に、桜台部での直径10.7cm、口縁部での直径14.1cm、高さ5.4cmのラッパ形に開く口頸部をとりつけたものである。器厚は口頸部で1.8~0.7cmで厚手であるが、体部は不明である。全体的にどっしりした厚手の感じがあり、特に体部両側端部において最大の厚味を持っているようである。胎土は緻密だがややザラザラした感じが残る。成形は、口頸部、体部とも巻上げによる。口縁部は、口唇部において中凹の形態をとるが、外面では、その下にさらにかえり状の段をめぐらしている。文様らしきものは全くなく、全体に、内外面とも入念な横ナデが施されている。体部は外面では両側端部を除く全面にすのこ状の叩き目の痕跡が薄く見られる。一方両側端部は、体部最突端部から中心部方向9.1cmほどの範囲まで、それぞれ体部長軸を中心として回転する入念なナデ整形が認められ、これによって中心部の叩き目的一部分もかき消されている。

#### ④. 提瓶 (第21図12、写真43-1)

14号墳菴道部閉塞石手前のほぼ床面直上で正立に近い状態で発見された。口縁部が欠損した状態で発見された。色調は全般に黒味がかった灰色で、焼成は良好で部分的に光沢がある。胎土には若干砂粒を混じえる。形態は、片面が扁平、片面がだらかな半球形を呈する正面円形の体部の一側に上方に外反する口頸部をとりつけた器形である。両肩部には直径1.3~1.8cm、厚さ3mmほどのボタン状の粘土貼り付けがある。口頸部は接合部での直径6.4cmで、垂直に立ちあがり、口縁部では外反する。残存する口頸部の上端部には、横向の波状の櫛目沈線が施されている。体部は、正面形は直径23cmほどの円形で、全面に体部の中心を軸としてロクロ回転によって施された櫛目の渦状沈線が施されている。この櫛状工具の歯数は8本ほどで、施文は中心部から、周縁部へと片面6回転ほどしながら行なわれている。なお、体部の成形は巻きあげもししくは輪積みによっているが、これはどうやら体部全体が一気に形作られたものではなく、正面と背面の2つが別個に成形された後で接合されているものである。さらに、輪積みもししくは巻上げの痕跡があったと思われる部分には、櫛目文様の上からナデ調整が施されているので、特に周縁付近では、等間隔に櫛目が消されている。なお、体部の厚さはおよそ18cmである。器厚は口頸部で6~7mmで、体部はそれよりは厚手の感じだが正確には不明である。

#### ⑤. 平瓶 (第21図10、写真43-2)

5号墳で菴道部閉塞石手前の床面直上で横竪と隣接して発見された。口唇部にわずかの破損があるほかはほとんど完形である。ただ、横竪との接触の際の衝撃によるものか口頸部が折れ、また、底部と体部との境目付近にも割れがある。色調は、全体的に濃い暗青灰色を呈するが、体部上半(肩部)は白っぽい灰色となっている。焼成は良好で、固い焼きとなっている。胎土は全般に緻密だが、砂粒などを含みザラザラした感じがある。形態は、底部はやや凹凸のある

平底で、体部は下から上へと丸味を帯びながら立ちあがり、肩部も上に凸のゆるやかな曲線をえがく。体部と肩部の間には、2本のヘラによる沈線がめぐっている。器形としてはその簡明瞭な稜線を形成せず、全般的に体部は、角のない丸味がかった、従って内容量の豊かな印象を与えるものとなっている。肩部は特に、半瓶特有の片上がり的な形態を示さない。上方に直線的に広がる口頸部は、肩部の中心より縁辺に偏した部位に直立した状態で接合している。なお、口縁部の直径は6.7cm、接合部では4.0cm、肩部の最大直径は15.5cm、底面の直径は6.4cmで底部から口縁部までの高さは15.5cmである。器厚は全般に薄手で0.5~1.0cmである。特に口唇部は先尖りとなっている。成形ははっきりしないが、巻上げと思われ、ロクロによるナデ調整が施されている。底部はやや凹凸があるがこれもヘラケズリが行われた上にナデ調整がなされている。

#### ⑥. 罩

表記された資料で、小破片1点のみである。おそらく体部破片であろう。外面にはすのこ状、内向には青海波の、それぞれ叩き目が全体に見られる。

以上の出土遺物を、東海、関西方面の須恵器編年表と対照してみると、これらは、おおむね7世紀後半~8世紀にかけてのものに該当するだろう。このうち、①長頸壺の(イ)のタイプ、②長頸瓶、③横蓋、④提瓶、⑤半瓶などは7世紀的な須恵器と考えてよいのではないだろうか。①の長頸壺の他のタイプはいずれも8世紀のものと考えられる。

#### b. 土師器 (第22図、写真43-3~7)

宗禅寺横穴群出土の土師器は、ロクロ不使用で内面を黒色処理した环のみ8点 (塊形破片1点を含む) 出土した。その内5点はほぼ完形品である。以下横穴毎に記述する。

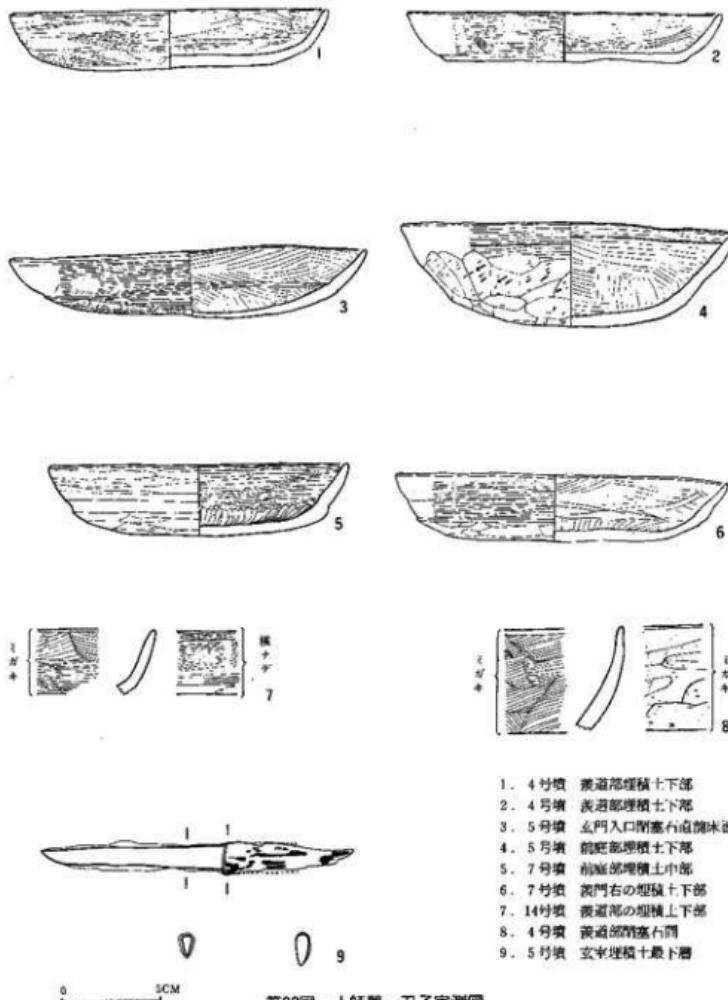
4号横穴では、須恵器と共に漢道部埋積土下部に集中して出土している。図1は、口縁から体部の一部を破損しているがほぼ完形品である。漢道部の東寄り、埋積土下部で逆位で検出された。体部と底部の境に外面では稜線を、同じ部分の内面では曲折する変化をもつ、器高の低い丸底环である。稜線から上は内反し、器厚はしだいに薄くなる。底部中央周辺は平坦に近い。胎土は緻密で、石英粒を中心とした砂粒を含む。焼成は良好で体部外面はにぶい橙色~にぶい黄褐色を呈する。外面の器面調整は、体部で横方向のミガキ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキがなされている。ヘラミガキの痕跡は底部周縁部で特に明瞭である。内面は、ヘラミガキの後黒色処理されている。体部は不整な横方向、底部ではまず放射状に、次ぎに三角形状に、最後に周縁部にヘラミガキが施されている。器高2.5cm、口径16.1cm。図2は吾を欠損しているが、復元の不能なものである。漢道部の東寄の閉塞石の乱堆積周辺 (埋積土下部) で一括して出土した。体部下端に輕い段をもつ平底环である。段から上は内反し器厚はほぼ一様である。

段に対応する内面は曲折して底部に至る。胎土に石英粒を主とした砂粒をかなり含む。焼成は良好で、外向は淡黄色～浅黄色を呈する。外向の器壁調整は、体部が横ナデ、底部は不整方向のケズリである。内面はヘラミガキの後黒色処理されている。段は横ナデにより形成されている。器高2.9cm、口径16.9cm（推定）。なお、これと同一個体と思われる破片が、中央付近の埋積土下部より出土している。この他に、漢道部に遺存する閉塞石間で、塊と思われる体部破片が出土している。内外面共に横方向のミガキがなされ、内面は黒色処理されている。（図8）

5号横穴では完形品が2点出土している。図3は完形品で、玄門入口閉塞石直前の床面で須恵器の横銚、平瓶と共に出土した。（出土状況の詳細は遺構の項参照）体部と底窓の境に軽い段をもつ、器高の低いわば盤状を呈する丸底壺である。段より上は内反し、器厚はややふくらみをもって薄くなる。段に対応する部分の内面はやや曲折して、ゆるやかな底部に至る。器厚が薄く、特に底部では2.9mmを測る。体部外面には輪積みか巻上げの痕跡と思われる横方向のキレツが1条認められる。胎土はやや緻密であり、砂粒を含む。焼成は良好で、体部外面はにぶい赤褐色を呈する。外向の器壁調整は、体部は横ナデ、底部はヘラケズリである。内面はヘラミガキの後黒色処理されている。体部は横方向のミガキ、底部は、中央部を除いて、円周に沿った直線方向のミガキである。段には横ナデがなされている。器高3.3cm、口径18.4cm。図4は、口縁と体部の一部を欠損しているがほぼ完形品である。前庭部左側の埋積土下部で逆位の状態で出土したものである。体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、体部と底部の境に不整な軽い緩線をもつ丸底壺である。大分ゆがんでおり平面形は長円形に近い。内面には外向に対応する曲折ではなく丸味をおびている。口縁部外面に、斜めに一条のキレツが入っており巻上げ成形と思われる。胎土はやや緻密で、石英粒等の砂粒を含む。外向の色調はにぶい黄橙色～褐灰色を呈する。器面調整は、外向に於ては口縁部を横ナデし、その後体部から底部にかけて粗いヘラケズリを施している。内面は、不整方向であるが丁寧なヘラミガキ（体部は斜め方向、底部は不整方向）の後黒色処理されている。なお、内面の口縁端部より約8mm下には、幅0.8mmの細沈線が黒色処理を切って全周しているのが認められる。器高5.3cm、長径16.5cm、短径15.5cm。

7号横穴では完形品が2点出土している。図5は完形品で前庭の堆積土中から一括出土したものである。体部下半に沈線をもつ丸底壺である。段から上は、ややふくらみをもって内反し、沈線に対応する部分の内面は曲折して底部に至る。口縁部外面には輪積みもしくは巻上げと思われる一条のキレツが認められる。底部中央周辺は平底に近い。胎土は緻密で砂粒が若干混じる。焼成は良好で、体部外面は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。器面調整は、外向体部は横ナデによる沈線を燒として上は横方向のヘラミガキ、下は底部にかけてヘラケズリの後ヘラミガキをしている。内面は丁寧なヘラミガキがなされている。まず体部に横方向のヘラミガキがなされた後、底部に放射状のヘラミガキがなされている。底部の放射状ヘラミガキは中央から周辺に向かって幅3mm前後の単位で施され、周縁部にはヘラ状工具によって押し出された粘土

の盛りあがり痕跡が認められる。内面の黒色処理は光沢があり、遺存良好である。器高3.6cm、口径15.2cm。図6は、口縁部から体部の一部を欠損しているのがほぼ完形品である。蓋門右の埋積土下部で一括出土した。体部と底部の境に段をもつ丸底窓である。段から上はほぼ一様な厚



第22図 土師器、刀子実測図

きを以ってやや直線的に外傾する。段に対応する部分の内面は、曲折して底部に至る。胎土は緻密で、石英粒を中心とした砂粒を少量含む。焼成は良好で体部外面は淡黄褐色を呈する。器面調整は、外向は体部が横ナデ、底部はヘラケズリがなされている。内面は体部に横方向のヘラミガキ（底部との境は強め）、底部は放射状のヘラミガキがなされた後黒色処理されている。器高3.3cm、口径16.5cm。

14号横穴では、渡道部の埋積土下部より、体部外面に軽い段をもつ破片が出土している。（図7）段から上は内反し、段に対応する部分の内面は曲折して底部に至る。口縁部外面には巻上げもししくは輪積の痕跡と思われる一条のキレツが走っている。胎土は緻密で砂粒を少量含む。焼成は良好で体部外面は褐灰色～黒褐色を呈する。段の上は横ナデであり、段自体も横ナデにより形成されている。段より下はヘラケズリが施されているようである。内面はヘラミガキの後黒色処理されている。

### c. 鉄製刀子

5号横穴玄室の台床上を薄くおおう、灰褐色粘質土面で人骨と共に刀子が1点出土している。かなり錆化がすんでいたが、切先から柄部の一部まで遺存している。柄部の木質が残存している。身は平造り、<sup>3.5</sup>区は刃部に段のある刀区である。全長15.5cm、うち柄部6.6cm、刀幅1.2cm、棟巾0.4cm。<sup>⑪</sup>

## 〈土師器に関する考察〉

### 1. 分類（第1表参照）

宗禅寺横穴群出土の土師器の大部分を占める壺（8個体）について分類を試みたい。

これらの壺は以下の諸点において基本的な共通点をもつ。第1に成形においてロクロを使用していない。第2に器形的特徴として3点ある。①器高が低い。（約2～5cm）②外面の体部と底部の境に軽い屈曲（棱・段・沈線の3種類）をもつ。③体部は大部分のものが内反する。第3に器面調整に於て、内面はミガキの後黒色処理されている。なお、本稿でいう体部と底部の区分線は丸底の場合、最も傾斜変換が明瞭な部分であって、接地面としない。胎土は概して緻密であり、石英粒を中心とした砂粒を含む。焼成は良好なものが多く、外面は淡黄色～赤褐色を呈し、黒斑現象がみられる。

これらの壺は、底部の形態によってA類一丸底、B類一平底に大別できる。B類のものは、図2の1個体のみである。次ぎにA類は、外面体部の屈曲と対応する部分の内面の形態及び器高によってAI類とAII類に分類できる。AI類は外面の体部と底部の境を画するに対応した形で内面も曲折して底部に至るもので、器高は2～4cmの間におさまる。A類の大部分をしめ

ア II 類は、内面が外向の（稜線）に対応する曲折をしめさずに、口縁部から丸味をもって底部に至るもので図 4 の 1 点のみで A I 類に比して器高が高い(4.8cm)。B 類の 1 点図 2 はこのような基準に基づけば B I 類に相当し、内面の底部との曲折は比較的きつい。更に A I 類、A II 類、B I 類は界面調整の違いによって細分される。即ち、細分の基準を、a 類一体部がミガキで底部がヘラゲズリののちミガキ仕上げをされているもの、b 類一体部が横ナデで底部がヘラケズリされているもの、とすると、ここでは A I 類は、A I a 類、A I b 類に分類されるが、B I 類は B I b 類に相当するものしかない。次ぎに外面の体部と底部の境の形態を 1 類—稜線、2 類—段、3 類—沈線とすると、A I a 類は A I a - 1 類と A II a - 2 類に分かれ、A II b 類は A II b - 1 類に相当し、B I b 類は B I b - 2 類に相当する。ただし、この段は非常に軽いものである。なお、A II b 類(図 4)は 1 個体のみであるが、外面の体部と底部の境(稜線)と界面調整の違いが一致しない唯一の例であり、稜線自体も不整なものである。

## 2. 型式

宗神寺横穴群出土の土師器壺に共通する基本的特徴、1、ロクロ不使用、2、〈器形〉①器高

第1表 宗禪寺横穴群出土土師器分類表

が低い、②外面の体部と底部を区画する稜・軽い段、沈線がある。③体部内反、3、(調整) 内面のミガキ+黒色処理の3点は、氏家氏の設定された栗団式及び国分寺下層式の2型式の範ちゅうにわたっている。氏家氏は栗団式と国分寺下層式の坏の違いを主に形態的特徴から次のように規定している。①栗団式の坏は「段もしくはくびれ部の形成が顕著であり、上器内面でも口縁部と底部とを区別することが可能」である。(『陸奥国分寺跡』1961)、②国分寺下層式の坏は丸底で「第I類は坏腹部外壁に軽い段を形成し、これに対応する器内壁に特に識別できるような変化をもたない」「第II類は第I類にみられた段が底部近くに移行したもの」である。「第III類は、内反気味の口縁からそのまま底部に接続するもので、識別しうる一線を画していない丸底のもの」である。(「陸奥国分寺出土の丸底坏をめぐって」1967) 更に氏家氏は『善光寺横穴群調査報告書』(1968)で栗団式II類を設定され、その特徴を「体部と底部の接点において、外側では稜線を、内側ではその部分で曲折する特殊な変化を示す」とされている。

以上の3つの型式設定基準に従えば、先に分類したA I a - 1類、A I b - 2類、A I b - 3類は栗団式II類に、A II b - 3類は国分寺下層式I類に、B I b - 2類は、II類に各々相当する。

しかし近年、ロクロ使用開始直前の土師器坏に関しては、阿部義平氏(1968)、桑原滋郎氏<sup>22</sup>によって主として器面調整の面からの再検討がなされてきており、桑原氏は、栗団式II類と国分寺下層式の区別を「体部にまでへら削りあるいはへらミガキの及んでいるものを」国分寺下層式としている。<sup>23</sup>桑原氏は更に翌年、国分寺下層式を、技術的な特徴を加味して細分している。氏の見解は、「坏においては、栗団式の体部の横ナデ調整が国分寺下層式に於ては消滅し、栗団式では底部にのみあるケズりが体部にまで及び、更にミガキ仕上げが加わるものがある」とまとめることができる。

桑原氏の基準に従うと、当横穴群出土の土師器坏は、A I b - 2類、A I b - 3類、B I b - 2類は栗団式II類に、A I a - 1類とA I a - 3類のみ国分寺下層式となる。なお桑原氏の細分に従えば、A I a類はC(ミガキ仕上げ・沈線)、E(ミガキ仕上げ・沈線なし)に相当し、B(体部ケズり、体部と底部を沈線で画す)、D(ケズり仕上げ・沈線なし)はみられない。<sup>24</sup>

従ってA I b - 2類、A I b - 3類に於て、氏家氏、桑原氏の両視点は一致するが、A II b - 3類、B I b - 2類に於て、くいちがう結果となる。

即ち、同一型式名称を用いながら、同一個体について実際に両者の基準によって認定された型式に相異を生じている。個体に即していえば、図1は、内外面の器形の特徴では栗団式II類になり、器面調整(ミガキ)からすれば、国分寺下層式となる。又図2は体部内外の器形の特徴は国分寺下層式であるが、器面調整(横ナデ)からすれば栗団式II類である。なお、図5は内外面の器形の特徴、調整いずれの面からも共に栗団式II類であるが、外面の体部と底部を画する沈線はナデ調整がなされている。従ってA I a - 1類、A I a - 3類、A III b - 3類、B

I b - 2類は、体部の内外面の形態的特徴と器面調整技法の違いに於て、栗圓式II類の要素と国分寺下層式の要素を合わせもつものといえよう。そして確實に栗圓式II類としうるものは、A I b - 2類、A I b - 3類のみである。

次に、宗禪寺横穴群で、前述した栗圓式II類の要素と国分寺下層式の要素をあわせもつ坏がある程度まとまった量で出土していることから以下の諸点のような問題が提起されるであろう。

1. 栗圓式II類から国分寺下層式への過渡的様相として捉えられるのかどうか。
2. 横穴古墳という場の特殊性、例えば、集落で使用される土師器と、横穴古墳に供給される土師器の違いに関連するものか。
3. 宗禪寺横穴群自体の地域的な特性に関連するものか。

そして、以上の問題を解決していく手続きとして、①從前の、主に宮城県の各地域の横穴群の発掘調査に於て、器形的特徴からのみ「栗圓式」「国分寺下層式」と認定されてきた土師器（主に坏）を、器面調整技法と器形的特徴の対比の上で捉えることによって、宗禪寺横穴群のような両型式の要素をあわせもつ上師器坏の存在の有無、在り方を検討する。②集落跡の発掘調査によって、遺構の切り合い、層序関係によって把握された一括資料と①の成果を比較検討していくことが必要となろう。更に①と②の比較、検討によって、体部内外の形態的特徴と器面調整技法の2つのメルクマールの一方が他方を型式設定基準として包括しうるのかどうかといった点などが、必然的に検討されることとなろう。

## 宗禅寺横穴群出土の人骨について

葉山杉夫

### はじめに

仙台市根岸町の宗禅寺境内の南向き崖面の横穴群について、1975年1月、仙台市教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。この調査から1号墳から15号墳の横穴群の存在が確かめられ、1号墳から14号墳までの横穴について考古学的調査がおこなわれた。この横穴群のうち、5号墳と9号墳から頭骨を含む数個体分の人骨片が出上した。この人骨は同じ広瀬川沿いの愛宕山横穴群出土人骨（仙台市教育委員会、1974）に比べるといくらか保存状態は良いが、やはりその多くは泥土化あるいは消失している。保存されている人骨片も風化がかなり進行している。とくに玄室床面に接した部分の保存状態が悪く殆んど消失している。

この出土人骨の出土状態ならびにその形状の概要について記す。

#### 1) 5号墳人骨

人骨は玄門より向って右側に左脳頭骨を玄室床面に接し、顎頭骨は消失しているが玄門方向を向いた状態が推定できる。玄室床面に接した頭骨部は消失している。保存されていた頭蓋冠の一部も風化が進行しており脆弱である。頭骨以外の骨では体幹骨、上肢骨はない。玄門向って左側玄室内に左右の大転骨骨体中央部の約5横指分が各1木と右脛骨の上部骨体栄養孔部の約4横指分の下肢骨の一部などである。この下肢骨も頭骨と同様風化がかなり進行している。これらの5号墳の頭骨と下肢骨はその出土状態から同一個体であることも考えることができる。

頭骨は右頭頂骨と後頭骨および右の側頭骨のそれ一部でこれらの骨は縫合部により連結している。この連結した脳頭骨の前方に人骨破片化あるいは骨粉化したものが存在したが、一部は頭骨破損片であることは判別することができるがその他の骨粉は不明である。

後頭骨の外後頭降起の発達は強く、上項線、下項線とも一部しか保存されていないが保存されている部分の上、下項線ともかなり強い、骨質も厚く頑丈な後頭骨、頭頂骨であったことを推定することができる。右の側頭骨はアステリオン部附近の一部のみであるが、乳様突起の基底部からかなり大きい頑丈な乳様突起であったことが推定できる。残存する人字縫合の右側三角部の縫合は簡単で、縫合の整合は進行しており、Brocaの癒合度では外板で1度、内板で3度である。残存する頭骨の形状から熟年の男性（？）と推定する。

大転骨は左は風化の進んだ骨体中央部である。右は泥土に近い。左の人転骨後面の粗線は殆んど消失しているが、骨体中央欠状径は29mm（推定）、骨体中央横径27mmで人転骨骨体中央横断示数（推定）は107.4となり、古墳時代人（城、1938）の男性よりも大きく現代畿内人に近い。粗線についても周囲の形状から推定して強い発達は考えられない。右脛骨は上部骨体部すなわち栄養孔附近が保存されていた。栄養孔部矢状径30mm、栄養孔横径は20mm（推定）これから脛

骨栄養孔部横断示数（推定）は66.67となり、榮養孔部矢状径、横径とともに古墳時代人（城、1938）の男性よりもやや小さいが、横断示数では古墳時代人と縄文時代人の中間の数値を示し、扁平性は縄文時代人に近く、現代畿内人よりはるかに小さい示数値を示し、扁平脛骨であること推定することができる。

頭骨および下肢骨の出土状態から同一個体とも考えることができるが、下肢骨において大腿骨では現代人に近い傾向があり、脛骨においては古代人の傾向をもつことから考えて断定はできない。5号墳人骨を同一個体と仮定した埋葬時の自然状態を考えるならば、頭方向を玄室右側に、体軸は台床の長軸に平行に左側臥位で埋葬されたものと推定することができる。

## 2) 9号墳人骨

玄室内中央から左側にかけて3個体分の頭骨と玄室内中央から右側にかけて数片の四肢骨が散乱の状態で出土している。これらの骨が仮葬（再埋葬）などによる人為的に移動されたものか、玄門附近の流入土川による土川で押し流されたものは判定しがたい。いずれにしても出土状態からは頭骨と四肢骨とは個体別に分けることはできない。

3個体の頭骨は玄室内中央から頭骨(a)、頭骨(b)、いちばん左側の頭骨(c)の3個体ともに一部の頭蓋冠が保存されているもので、多くの骨は5号墳頭骨と同様、泥化あるいは消失している。

頭骨(a)：右の側頭骨、頭頂骨および後頭骨などのそれぞれの一部分と少量の小骨破片である。右の側頭骨の乳様突起の突起部は欠損しているが、その基底部から考えてかなり大きい頑丈な乳様突起であったことを推定する。側頭骨の頬骨弓部も欠損しているが、側頭骨鱗状部の膨隆度、頬骨弓部の起始部の形状からフェノチギーが考えられる。外耳孔は円形で、外耳道骨瘤は存在しないが、外耳道上棘は弱いが存在する。乳突上溝は深く、乳突上稜もやや強く発達している。後頭骨の外後頭隆起はやや強く突出、外後頭稜も発達している。項平面は中等度の大きさで、上項線、下項線とともにかなり強い明瞭な発達がみられる。保存されている人字縫合は簡単で、縫合の癒合は開始しており、Brocaの癒合度は外板で2度、内板で4度。また人字縫合右三角部に示指頭大の縫合骨（インカ骨）が1個存在する。頭骨(a)の形状から熟年の男性と推定する。

頭骨(b)：前頭骨、左右の頭頂骨と後頭骨などのそれぞれの一部と、これらと連結していない右側頭骨の岩様部の骨破片、小骨破片であると泥化あるいは欠損消滅している。右側頭骨の乳様突起は骨破片で出土したものであるが、突起部は低く、全体に小さく、外側への突出はない。後頭骨の外後頭隆起の発達は弱く、内板、板間層、外板とともに薄いものであったと考えられる。上項線、下項線とともに発達は弱い。残存する矢状縫合、人字縫合はともに簡単で、それぞれに癒合はない。頭骨(b)は形状から壮年の女性と推定する。

頭骨(c)：左右の頭頂骨、後頭骨のそれぞれの一部とこれとは連結していない左右の側頭骨お

より前頭骨の骨破片で、あとは泥化あるいは消失している。左右の頭頂骨は人字縫合との中央連絡部の僅かなもので頭頂骨の頭頂部は消失している。左のアステリオン部の側頭骨は拇指頭大のものが残存し、このアステリオンはヒトの正常型である。後頭骨の外後頭隆起はやや発達し、後頭骨の骨質は歯牙な形状であったことが推定できる。また上項線、下項線ともにかなり強い発達が認められる。人字縫合の縫合はやや複雑で融合は開始している。Brocaの融合度では外板で2度、内板で4度。人字縫合の中央部から左側アステリオン部へかけて、中央部から示指頭大、拇指頭大、胡桃大と3個の縫合骨が存在し、いわゆる横後頭縫合を形成する。この縫合骨は縫合異常で、南北のペルー族にこの出現頻度が高いことからインカ骨とも間接骨(*os epactale*)とも呼ばれている。この間接骨は頭骨の発生過程の縫合異常で、Rankeの分類(上条、1973)から頭骨(c)の間接骨は外側間接骨のひとつと考える。頭骨(c)は残存する骨の形状から老年の男性と推定する。

9号墳の頭骨以外の骨は上肢骨では上腕骨の骨体部2本、前腕の桡骨骨体と推定できるものが2本出土しているが、いずれも泥化して左右の鑑別はできない。下肢骨では左大腿骨の骨体部と左右不明の脛骨骨体部のそれぞれ一部であるが、上肢骨と同様その形状については観察できず、また頭骨(a)、(b)、(c)との関係も明らかにできない。

### ま と め

宗祇寺横穴古墳群のうち5号墳、9号墳から4個体の頭骨と数片の四肢骨が出土した。頭骨はすべて頭蓋症を形成する脳頭骨破片で顔面頭骨および頭蓋底を形成する骨は消失し、出土していない。3個体は老年の男性、1個体が中年の女性と推定する。5号墳出土の頭骨は同じ玄室内の下肢骨と同一個体と考えることもできる。9号墳頭骨(c)に外側間接骨が認められた。

観察、計測可能な項目はきわめて少なかったが、そのいくつかに古墳時代人の特徴を認めることがある。(東北大学歯学部助教授)

### 参 考 文 献

- 1) 仙台市教育委員会「愛宕山横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第8集、1974。
- 2) 城一郎、古墳時代日本人骨の人類学的研究。第3部下肢骨。人類学報、1:245-324、1938。
- 3) 上条康彦、口腔解剖学1.骨学、アトーム社1972。

## 6. まとめと考察

### (1). 横穴の形態と構造について

昭和28年暮れ発見、調査された15号墳も含めて宗禅寺横穴群の各横穴の形態をまとめてみると、玄室、玄門、羨道、羨門、前庭といった基本的構造自体に大きな変化は認められないが、にもかかわらず、そこにはきわめて多種多様の内容があるといえる。特に著しいのは、玄室の立面形態の変化である。それらを、平面形と立面形を組みあわせた上でタイプ別にわけてみると次のようになる。

〈平面形〉 〈立面形〉

A 方 形	— 家 型 (整正系切妻式)	4、8号墳
(※玄門も方形坑)		
B 方 形	— 家 型 (伏斗式)	3号墳
C 方 形	— ドーム型	5、6、11、15号墳
D 方 形	— アーチ型 (推定を含む)	1、2、9、14号墳
E 方 形	— 変形アーチ型	7、12号墳
F 方 形	— 変形ドーム型 (略式)	10、13号墳

なお、平面形をすべて方形としてしまったが、詳細に見れば、これも圓丸方形、長方形、不整形など多種多様のものがある。

また構造的には、遺体安置施設である台床の有無、形態によるタイプ別けができる。

イ.	台床有(a)コの字形	3台床 縁無し	1、3、4号墳
~	(b)コの字形	2台床 縁無し	8号墳
~	(c)コの字形	1台床 縁無し	2号墳
~	(d)奥壁沿い	1台床 縁有り	15号墳
~	(e)奥壁沿い	1台床 縁無し	5号墳
ロ.	台床無し(a)内部に区画溝あり		7号墳
~	(b)区画溝ナシ		6、9、10、11、12、13、14号墳

※ 台床の最高部が右の台床にあるもの。他は奥台床にある。

ここで気がつくのは、台床を有し規模も大きく、内部の姿に十分な企画的配慮がこめられていると思われる横穴が、15号墳を除いてほとんど西半分すなわち埋没谷の奥の方に集中している点である。

玄門、羨道、羨門、前庭などには、大きさのちがいや溝の有無など若干のちがいは認められるが、基本的にはさほど大きなちがいはないようである。

これら横穴の形態、構造の面での多様性というものは、いったい築造、使用の上での時期的なちがいを物語るものなのか、それとも、被葬者もしくは築造者の階級あるいは年齢差といった個別的なちがいを物語るものかといった点についての判定はきわめて難しい問題である。

今回調査した横穴のすべてが同一時期のものでないことは一部においては確認された。すなわち、1号および2号、11号および12号は、それぞれがほぼ完全に接觸または、きわめて接近して、一方が他方によって破壊されている状況が確認されたので、両者が同時に築造されたということはほとんどありえない。しかし、それではどちらが先に築造されたのか、といった点について明確な結論はだせなかった。ともかくも、15基の発見横穴のすべてが同一時期のものではない、ということはいえるわけであるが、かといって、これほどの多様性が15基の内に含まれている点を群集墓という横穴の性格面から考えると、それらの多様性が即時的なちがいを物語っているとはいいきれず、やはりある程度のタイプの複合ということを考えなければならないと思われる。

以上にあげた形態、構造の諸タイプについて、なお注意すべき点などをまとめてみると、

(イ) 家型横穴3基のうち、2基は屋根の軒回りの線などを明瞭に表示した整正系といわれる精巧なタイプのもので、このような精巧なタイプの横穴の発見に仙台市内でも数少ないものである。8号の方が4号よりも部分的に精巧さが加わっているようである。

(ロ) 家型横穴の残る1基、伏斗式のものは、特異な屋根の形態であるが、工具痕の形態などから若干後世に変造された可能性もないわけではないが、このような形態のものは県内では、仙台市内の善応寺横穴2号墳および亘理町竹の花横穴以外に発見例がない。

(ハ) E、Fの変形アーチ、変形ドームとしたのは、天井部の稜線や丸みが不明確なものを示す。

(ニ) Fの変形ドームのものには、玄室、玄門、羨道といった区別がほとんど設定されておらずズンドウタイプであり、本来的な横穴かどうかとも疑われる所以であるが、内部の埋積土の状況が、他の横穴とほとんど同じであり、また他の同様の横穴の調査例で遺物や人骨片が発見されることがあるので、本来的なものの退化もしくは略式の横穴であるといえよう。なお9号墳にもややそのような傾向を感じさせる面があるので、これはむしろその中間形態ともいえようか。

(ホ) 台床をもつものともたないものとでは、數的にはほぼ半々であるが、前者の横穴には横穴の構造の上で全般に入念さが目立つ。

(ヘ) 特に、最も精巧な構造の横穴である8号墳が、全体の中ではほぼ中心的な位置を占め、しかも隣接する横穴との距離が離れている点が注目される。

(ト) 台床は配置の上から見ればコの字形のものと奥壁沿いのみのものとなる。コの字形のものは築造以後における追葬を意識しているのであろうが、コの字を形成する複数の台床は、

それぞれ溝や高低差で区別されている。2号墳ではこの区別が見られなかつたので、これも退化もしくは略式のものということになるのではないだろうか。

(チ)奥壁沿いの台床をもつ15号墳は、有縁という点および台床の高さが50cm以上という点は、木横穴群中では特異な存在である。

(リ)台床のない横穴のうち玄室内に溝をもつものは11、12号墳も該当するが、これらはいずれも単なる排水溝であり、7号墳の場合には、明らかに玄室内を区画する意図が認められるという点および全体的な横穴の築成が精巧であるという点で異質である。

## (2). 横穴築造上および機能面での問題点

### イ 横穴内部の工具痕のあり方

横穴の築造の状況を何うことのできるものが横穴内部に残された築造時の工具痕である。工具痕は、古くから開口して内部の剥落などがある1、2号墳等では、ほとんど残存していないかったが、その他の横穴では、玄室部分を中心として良好にその工具痕を観察できるもの多かった。その結果、残された工具痕には何種類かの異なるタイプのものがあることが判明した。

- I. 整形工具痕 { a. 工具痕幅10~12cmのもの | 2.4.5.6.7.8.9.11.12号墳の主として天井、壁面  
b. 工具痕幅6~8cmのもの }
- II. 荒削り工具痕 { a. クマデ状のもの…5号墳玄室壁面  
b. キザミ状のもの…6.7.8.9.11.12号墳の主として玄室側壁コーナー付近  
c. 馬蹄状のもの…5.9.10号墳玄室床面  
d. ピッケル刺突状のもの…3号墳玄室天井、壁面  
e. その他…10号、13号 }
- III. 刻線 (家型横穴の転回りおよび棟の表示線) …4.8号墳玄室天井部
- IV. えぐり状のもの…5.8号墳玄室天井部中央



第23図  
工具痕模式図

これらの痕跡は、その規則性、企画性から考えても自然に成立したものでは全くなく、すべて横穴の築造時に生じた痕跡である。しかもその築造に際しては、何種類かの異なる工具もしくは異なる工具の使用法があったと考えられるわけである。そしてまた、これらの工具はすべて鉄製品であろうということは、岩盤の固さと、その痕跡の鋭利性を考えあわせれば容易に推定できる。

このうち「整形工具痕」としたものは、一部の横穴を除けばほとんどの横穴に一般的に認められるもので、きわめて滑らかである上、その間隔および方向がほとんど一定しており、きわめて整然たる印象の強いものである。工具痕の中央付近が浅くくぼみ、両端が高い状態なので、工具の刃物は丸味をおびた薄手のカンナ状のものであろう。(渡辺一雄氏によれば、手斧様のものらしい、といわれている)この工具痕は、上述の通り幅の広いものと狭いものの2種類あり、これは、やはり使用法のちがいというよりは、大小2種類の工具が使われたと見るべきだろう。この工具痕は、特に玄室や玄門の天井部および側壁の上半部において全般的によく観察された。また、側壁下部や床面では磨滅が著しく、一部を除きほとんど確認できなかつたが、本来は床面にもそうした工具痕が施されるのも少なくなかったと考えられ、磨滅などが著しいのは追葬などによるいくたびかの出入りがあったことを物語るものだろう。ともかくこれらの工具痕は、その入念さから考えて横穴築造の最終段階において施されたものということができるだろう。

「荒削り工具痕」は「整形工具痕」に比し部分的に検出されることが多かった。これは、前者が後者の前の段階に施されるもので先後関係上、後者によって前者が削りとられてしまうものが多いことを物語るものだろう。

II a の「クマデ状」工具痕は、5号墳の玄室側壁と奥壁の下部コーナー付近でのみ見られるが、全くえぐりとったという感じの強いノミ痕である。模式図 a がそれだが、幅は平均7~8cm、えぐり角度は40~50度であり、円形の刺突痕は径1cm内外の先尖りの形態を呈する。ただし、この刺突は3本認められるところもあれば4本あるところもあるが、いずれも一定間隔である。その痕跡から判断すると、クマデ様の工具を想定せざるを得ない。

II b の「キザミ状」工具痕は、主に玄室側壁コーナー付近に残存しているケースが多かったが、整形が十分におよんでいない側壁の下部などでも認められる場合があった。側壁コーナー付近では、特に、壁の棱線に沿ったような配列が認められるので、築造者がそうした玄室の形態などに細心の注意を払っていたことが伺える。なおこの工具痕は、工具のちがいというよりは、使川法の上で、刃を壁面に垂直に打ちつけて作られた、という点を注目すべきだろう。

II c の「馬蹄状」工具痕は、5、9号の床面にのみ認められたもので工具の刃の形態そのものは、整形工具痕ときほどちがわないだろうと考えられるのに、その使用の段階できわめて不規則的で荒削りであり、凹凸の激しいものである。なおこの後に、整形工具による削りがかけ

られた形跡は認められず、玄室の床面については、この工具痕が最終段階のものとして使用された場合もあったことを物語る。

Ⅱdのピッケル刺突状のものは3号墳においてのみ認められた。これはすでに説明したとおり、木横穴群の工具痕の中では全く異質なもので、後世的な調整の際の工具痕である可能性が強い。

Ⅱeは、以上にいづれにも該当しないきわめて不規則なもので、これらが見られる横穴が10、13号といった、退化もしくは略式の横穴である点を考えあわせておく必要があるだろう。

Ⅲの「刻線」は、他の工具痕とちがい、整形や調整を意図したものではなく、明らかに、家の構造の明瞭な表示を意図したもので、従ってその状況も、他の工具痕よりは明瞭な線としてとらえることができるものである。この工具痕は、幅2~3cm、深さ1~2cmで断面円形であるので、丸ノミ様の工具が想定できる。

Ⅳの「えぐり状」のものは、その形態において、きわめて不規則なもので、工具による擦痕も不明確で、果たして工具の使用による痕跡なのかも判然としないものである。ただ、これをおそらく人為的なものであろうとしたのは、大井部の中央部にあって全体の形態の中で一定の位置を占めているからである。その形状は、直徑10cm前後の不整円形、深さ8cmほどで、内部は凹凸の激しい状況を呈している。

以上に述べた中で気がつくのは、工具に何種類かのものがあり、またその使川法にもそれぞれ異なった方法があるようだ、ということで、いずれにしろ、それらが各横穴の中ではほぼ共通的に見られるケースが多いので、専門的な築造者の存在を前提として、当時の横穴の築造技術を探る上で、一定の技術的傾向があることをこれらの工具痕が物語っているようである。

#### ロ、岩盤の亀裂による横穴構造に対する影響について

本横穴群が形成されている基盤岩層については、先に2.においてもふれたように、きめ細かくやわらかい凝灰質シルト岩層を主体とする大牛寺層であり、この層の下位層にあたる八木山層が不透水層であるために、また岩層自体のクラック(亀裂)も多いため、涌水が比較的頗善な岩層である。今回の調査では、横穴構造の上で、明らかにこの涌水処理を意識していたと思われる点が観察できた。<sup>39)</sup> それは第一に横穴内部における溝の配置状況にあらわれており、また第一に玄室内の台床の配置状況にも影響していたのである。特にそうした現象が明瞭だったのは1、3、4、8号墳の玄室内においてである。これらの横穴においては、例外なく岩層のクラックが何本か認められ、そのクラックを中心として数cm幅の帯状の範囲で、水分中の鉄分の影響により岩盤が褐色に変化している部分が認められたし、特に1号墳の場合は、調査中においても地下水が湧状となって涌出してくるほどであった。それでは、それらの涌水処理の為にどのような工夫がなされているのかを見てみると、

先ず第1には、上記横穴における玄室床面の溝の配置状況は一見ややバランスを欠いた配置

であるかに見えるが、実は、その溝の始まりは、すべてクラックが天井から奥壁を伝って床面に達する付近にあるのである。1号墳では玄室内に3本のクラックが認められ、そこからの涌水の処理に部分的な溝の深さを変えたりするなど相当工夫した形跡が認められる。4号墳では、1号墳に比べれば溝の数および長さなどはきわめて小規模だが、それでもやはり、クラックの位置と溝の出発点は見事に一致しているのである。もっともこの溝の配置が全くの涌水処理だけを目的として、めくらめっぽうの配置となっているわけではなく、やはり台床の配置や区画を意識した上での配置なのである。なお、玄室床面に溝を有するものは、他に、7、11、12号墳などの無台床のものがあるが、これらには明確なクラックではなく、配置も7号の場合は区画を重点的に考えたものと思われるし、11、12号墳の場合は、床面傾斜が全般にゆるい為、自然浸透の微量の地下水を処理するための単純な排水溝と考えられる。なお、溝が全く認められない他の横穴については、全般に、床面の傾斜が比較的急なものが多いようであり、そうしたことによって涌水処理の為の溝をあえて作らなかったものと考えられる。

第二に、台床の配置の問題であるが、上記の横穴は、いずれも床面をコの字形にとり囲む複数の台床を有する。台床の区画は、溝の配置および高低差によっている。このうち、床面からの高さの最も高い台床は玄室内における最も中心的な部分と考えられるのであるが、その配置が、これも見事にクラックの位置を避けるような状況になっている。例えば1、3号墳では、最高の台床は奥壁沿いの3分の2ほどの左側の部分を含める位置にあり、やや均衡を欠く配置となっている。つまり、玄室の北西方向にその中心部があることになる。これに対して、クラックは北東方向から南西方向へ向かって走っており、最高台床部にはほとんどかからないようになっている。3号墳の場合もこれと似た状況である。4号墳の場合、クラックは玄室奥壁中央部から南西方向つまり左側壁方向に向けて走っているため、最高台床の位置は、1、3号墳の場合とちがって右側壁沿いとなっている。この最高台床の面積が広いため、奥行よりも幅が長く、また、玄門の位置がやや左側により、羨道の軸方向が左に偏している点はすでに述べた。さらにつけて加えていうならば、この横穴は8号墳と同様切妻式の家型横穴で、その棟の方向は軸線と直交する。妻の位置も両側壁部分になる。一般には、県内、および他地方の切妻式家型横穴の場合、皆見の範囲では、棟の方向は軸に一致し、従って妻の位置も、奥壁および前壁部分になる例が非常に多いように見受けられるが、そうした点からすれば、これは岩盤のクラックを極度に意識した上での変形形態といえよう。以上を通してみると、結局、横穴内部の構造様式というものは、岩盤の状況次第ではある程度の変形形態を容易に生じるということを物語るものようである。

#### ハ. 横穴閉塞の形態、方法について、

今回の調査では、落盤ないし剝落堆積土を除去した段階で、完全に横穴が閉塞された状況を

示しているものは発見されなかった。横穴の閉塞箇所は2箇所（玄門、談道）あり、氏家和典氏によれば、横穴では本来二重閉塞をとる<sup>⑩</sup>、といわれている。今回の調査で、玄門、談道の両部分を検出したのは4、5、6、7、9号墳であったが、7号墳を除けば、いずれもほとんど痕跡的に検出したもののみであった。7号墳では、当初の閉塞形態をそのままの形で見ることはできなかつたが、玄門、談道にいづれにも閉塞施設の残存が見られた。それによれば、玄門入口には軸に直交する溝および両側壁中段の門穴と思われる一対の向かいあつた孔とが認められ、談道部では閉塞石の残存が認められた。ここから想定できる当初の閉塞の状況は、談道部は閉塞石および閉塞板で行ない、玄門部は、閉塞石が見られないことから閉塞板と門によつたと考えられる。いづれにしろ、二重閉塞をとつたものである。他の横穴では、10、13号の退化もしくは略式横穴を除けば、多かれ少なかれ、玄門部において閉塞施設の残存が認められた。このうち1号では、玄門入口と談道床面との間に高低差があるだけなのだが、これも、溝と同性質のものと考えれば一種の閉塞施設としてよいと思われる。閉塞石を有するものは4、5、9、11、12、14、15号であるが、これは必ずその下に溝を伴つてゐる。また特に注意すべきなのは、9号墳において崩壊した閉塞石の下に炭化した木片が発見されていることであり、おそらく閉塞板の残骸と考えてよいものと思われる。こうしてみると、閉塞石と閉塞板と溝といったものが当初の閉塞の様相ということにならう。なお閉塞石は、ほとんどすべて崩壊した状況で発見されたが、いづれも玄室方向に崩れこんでいる状況が伺われた。これは、閉塞石が閉塞板を外側からおさえこんでいるものであり、閉塞板の腐朽などの為、中にはいりこんだものということができる。なお7号墳にあっては、二重閉塞施設をもつてゐる状況が確認されたが、他の横穴すべてに二重閉塞がとられたかどうかはまだ若干疑問の残る所である。例えば4号墳にあっては、談道の幅は2m前後で、奥から入口までその幅はほとんど変わりがなく、このような状態で談道の閉塞がなしうるのかはやや疑問である。もっとも、談道天井の落盤などがあつたりして、談道の入口部分を、追跡などの時点で、幅を広げたというようなことを仮定すれば問題は別であるが、壁面の剥落により工具痕などを何うことができなかつたため確定できない。あるいはまた6、9号墳の場合は、談道の奥行がそれぞれ80cm、90cmと短かく、このような短い談道部を別途に閉塞する必要があったかどうか疑問である。ただこれも、この部分を談道ではなく、前庭と解釈すればまた別問題である。

なお、3、4、5、8号墳では、それぞれ玄門入口付近および談道の側壁中段の一部もしくは全体にわたり幅30~40cmぐらいの浅く丸いえぐりこみがなされている状況が観察された。これは例えば、玄門部や談道部を正面から見た場合に、側壁が不恰好に中ぶくらみになったような状況を意味する。このえぐりこみには剥落はそれほど著しくないにもかかわらず工具痕はほとんど見られず、なめらかな面をなしていた。むしろ磨滅した状況に近い、といえるかもしれない。このえぐりこみ状のものは、他の横穴の調査例でもしばしば認められている模様で、決して本

横穴群に個別に認められるものではないようである。ただ、従来の調査例では、これを単なる壁面の崩壊もしくは剥落として扱っているケースが多いようでして注意されてはいないようである。しかし、自然の崩壊もしくは剥落にしては、もっともそうした現象のあらわれやすい天井部がしっかりとしているにも拘らず側壁のみがこうした状況を呈するというのはやや不自然である。これもやはり何らかの人為的な所産と見るべきであるが、今のところその機能などを判定することはできない。ただ少なくとも、このえぐりによって築造時の工具痕がかけ消されている部分等が認められているので、どうやら築造当初のものでないということとはいえそうである。玄門と羨道にのみ認められる点から何か追葬時の閉塞状況に関連したものではなかろうか。

### (3). 遺物の出土状態と横穴の使用年代について

遺物を出土した横穴について、その出土状態などを列挙してみると次のようになる。

2号墳：須恵器（長頸壺破片）3点＝羨道入口付近埋土上部

4号墳：須恵器（長頸壺完形）1点＝羨道右側壁沿い床面直上（崩壊閉塞石のため破壊された状況で出土したが、本来は正立）

須恵器（長頸壺底部）1点＝前庭右脇床面直上

土師器（壺）1点＝羨道右側壁付近、床面直上、逆位

土師器（壺）破片1点＝羨道部中央床面直上

5号墳：須恵器（長頸壺）2点＝玄室台床前、床面直上、横転

須恵器（横蓋）1点＝羨道中央、玄門閉塞石前、床面直上、横転

須恵器（平瓶）1点＝羨道中央、玄門閉塞石前、床面直上、正立

土師器（壺）1点＝羨道中央、玄門閉塞石前、床面直上、正立

土師器（壺）1点＝前庭左脇、埋土下層、逆位、

鉄製刀子1点＝玄室台床上

人骨 1体＝玄室台床上、頭骨東、肢骨西、

7号墳：土師器（壺）2点＝前庭右側、埋土下層、逆位

8号墳：須恵器（長頸壺）1点＝羨道左、床面直上、正立

9号墳：人骨 3体＝玄室奥壁沿い、集骨？

14号墳：須恵器（提瓶）1点＝羨道右、閉塞石前、床面直上、正立

須恵器（長頸瓶）1点＝羨道、土中、破損磨滅、散乱

以上であるが、ここから、その出土状況について、いくつかのタイプ分けができる。

①. 玄室内に遺体とともに副葬されたもの…5号墳出土須恵器（長頸壺2点、鉄製刀子1点）

②. 玄門閉塞施設前に供獻されたもの…4号墳羨道部出土品、5号墳羨道部出土品、8号墳出土須恵器、14号墳出土提瓶

第2表 宗裡寺横穴群 各横穴のまとめ

③. その他、(A). 整理されたもの…4号墳前庭出土須恵器、5号墳前庭出土土師器、2号墳出土須恵器、7号墳前庭出土土師器、

(B) 廃棄されたもの…14号墳出土長頸瓶

このうち、①の5号墳出土の須恵器は、いずれも横転した状態で発見されたが、すでに述べたとおり、これらの須恵器はいずれも、やや安定感に欠ける形態をとっているため、玄門閉塞などの崩壊などの際に自然に横転したと考えられ、本来は正立の状態で置かれていたものと見て差しつかえないだろう。②の4号墳出土品は、いずれも淡道部右よりでの発見で、追葬時に側壁沿いに整理された可能性もないではないが、左側壁沿いに全く遺物の発見が見られないこと、正立した状態のものが多いこと、はたまた、玄室内最高台床の位置が右側壁沿いにあることに関連して、遺物が右側に集中していることに送葬儀礼上の何らかの意義づけがある可能性を加味して一応供献品とした。③の(A)、(B)の区別は、いずれも直接の送葬儀礼に使用されていない状況を示している点で共通するが、(A)が将来の追葬に備えるため意図的に整理された状況にある（たとえば5号、7号前庭出土の完形土師器が伏せた状況でおかれている点）のに対し、(B)は、完全に不用品として廃棄散乱した状況におかれたもののちがいを意味する。

以上を通して注意すべきは、特に5号墳において、「副葬」「供獻」「整理」と3種の出土状況がそろって見られるという点で、この点は、5号墳の玄門閉塞が、本横穴群中で最も良好に保存されていた点と人骨が1体だけである点と考えあわせて興味深いことである。これはつまり、この横穴が、最も追葬などによる後世の攪乱が少ない可能性、場合によっては、姫女横穴である可能性も暗示する。他の横穴では、玄室内における遺物の出土は、9号墳の人骨を除き全く見られず、附寒石も乱雑な配置で何度も移動したと見られ、何度も追葬が行われたと考えてよいだろう。

なお、人骨を出土した9号墳については、最上段に単独で位置する点、横穴の構造面で路式横穴との中间形態をとること、などから、編年的に比較的新しい位置づけを与えることができるのではないかと思われ、してみると、内部の人骨も、追葬時に周辺の横穴における、前代からの人骨を集骨しておくために造られた可能性もありえよう。

さてそれでは、本横穴群の使用年代はいつに求めることができるだろうか。

この問題を考えるにあたっては、やはり出土遺物に関する年代検討が先決である。

須恵器については、編年表に基づいて7世紀後半～8世紀に属するであろうと考えた。

一方、土師器坏についてはどうであろうか。本横穴群出土の土師器坏は、型式的には栗園式II類に属するものと栗園式II類および四分寺下層式の両者の様相を合わせもつものがあることはすでに述べたとおりである。栗園式の年代は7世紀から8世紀中葉頃までとされている。た

だし栗圓式 I 類、II 類と細分した場合の両者の年代はまだ明らかでない。国分寺下層式については諸説あり確定しないが、8世紀後半を中心としている点についてはおおむね一致する。

追葬という問題を加味すると、出土遺物の年代を即、横穴の開始年代とすることができるのは周知のとおりである。ただ、本横穴群の中では、5号墳が前述したとおり、比較的追葬による影響が少ないと考えられるほか、出土遺物にも、本横穴の出土品中では古い方に属する一定の時期の寵物が一括した状態で出土している。この5号墳を本横穴の築造当初に近い時期に作られた横穴とすると、宗禅寺横穴群の使用開始年代は出土遺物から考えて7世紀後半に求めることができそうである。一方、横穴使用の終末時期については、出土品のない横穴もあるので即断はしかねるが、今回の出土品中で最も新しいタイプと見られる遺物が8世紀後半を中心とすると見られる土師器壺（=国分寺下層式）であるので一応、横穴本末の使用時期としては、上限を7世紀後半とし、下限を8世紀後半に求めるべきであろう。

なお、3号墳では、奥壁や側壁のくりこみの存在や、壁面の特異な工具痕などから考えあわせて、8世紀以後の使用の可能性を持つが、これは、横穴の当初の使用形態とは別な次元に属するものと考えられる。

#### （4）横穴の被葬者について

今回の調査の結果、宗禅寺横穴群では15基におよぶ横穴の存在が確認された訳だが、これらは、一応、ひとまとまりのグループとしてとらえてさしつかえないと考えられる。この際のまとまりの意味は、厳密な意味での編年的な同一性を意味するのではなく、被葬者の系譜の面におけるまとまりを意味する。その趣山は、横穴の配置の上で、部分的な例外を除けばほとんど同一レベル付近に位置する、横穴間の距離に一定したものがある、また各横穴と軸方向（つまり開口方向）が、崖面の変化に沿った形で、自然に変移していること、などがあげられる。そして、その使用年代が7世紀後半から8世紀後半にわたるものと見られる点も、これまでの考察の中でふれてきた。今、ここで本横穴群の被葬者について考えていく上にあたって、周辺の横穴群、とくに向山地区に群集する愛宕山横穴群A、B地点、大年寺山横穴群の存在をぬきにしては、とうてい論を進めることが困難な問題であろう。これらの周辺の横穴群には未調査のものが多いが、形態、出土品などの上で、宗禅寺横穴と共通する面を少なからず持っている。

「愛宕山横穴群発掘調査報告書」においては、これら4ヶ所の横穴群は、被葬者の占める基盤が現在の広瀬川対岸の市街地付近に共通してあったとの観点から一つの大横穴ブロックとして把握した。ここでは、もう一步進んで、各地点の横穴群は、そうした一大ブロックの中における被葬者グループの単位を各々意味するものと考える。つまり、この仙台市向山周辺に存在する横穴の被葬者グループは、少なくとも4つ以上の単位に分けて考えることが可能なのではないか、ということである。さらに言い換えれば、現在の仙台市街部には、少なくとも4単位以



1. 宗福寺横穴群
2. 大牛寺山横穴群
3. 愛宕山横穴群 A地点 (城城)
4. ~ B地点
5. 上手内横穴群

6. 善光寺横穴群
7. 入生沢横穴群
8. 古屋敷横穴群
9. 東光寺横穴群

- A. 遠見塚古墳
- B. 法領塚古墳
- C. 鹿塚古墳
- D. 安久瀬古墳跡
- E. 南小泉遺跡

第24図 仙台市内の横穴と関連遺跡

上の古代氏族の生活の基盤があった、ということになる。横穴群の被葬者は、ひと口で言ってしまえば、これらの中の族長層の墳墓であったということになるのであろう。

仙台平野における横穴群の使用年代は、一部不確定のもの以外は、同じ仙台市の善応寺横穴群などをはじめとして7世紀後半～8世紀後半にその使用年代が求められているものがかなり多いようである。近年、東北地方における横穴の最古の様相はいわき市中田横穴<sup>④</sup>などをはじめとして6世紀後半に求める見解が定着化しつつあるが、してみると仙台市内の横穴群の多くは東北地方南部に横穴墓制が定着化した時期のものといえる。<sup>⑤</sup>この時期の仙台市街部周辺は、陸奥国分寺の建設、条里制の成立、そして弥生時代以来の大集落跡である南小泉遺跡の存在など仙台平野の中でも最も文化的、歴史的に比重の大きい地域であった。

一方、墓制としては、仙台市内には、これらの横穴群と近似した時期に形成されたと見られる高塚古墳がいくつか存する。法領塚古墳、安久源訪古墳<sup>⑥</sup>などの横穴式石室を有する高塚古墳がそれである。これらの古墳の開始年代はあるいは横穴群の開始年代よりも遅るものであるかもしれないが、その使用年代において重複した部分があることも間違いないところであろう。氏家和典氏らが述べているように、高塚古墳と横穴古墳とが埋葬形式という点では同じであっても、その立地形式や築造技術はたまたま送葬儀礼などといった面から見ればそこに大きな葬制の変革を見いだすことになる。しかもそれらの使用年代の上で併行する時期がある、ということにならなければ、そこに東国移住の問題も含めた複雑な社会情勢を想定しなければならない。

このような複雑な社会情勢の中で宗禅寺横穴群の被葬者をどのように位置づけるかといった問題は現状ではきわめて難かしく、関連遺跡群の調査、検討が進展することによってはじめて明らかにされるであろう。

## 註

- ① 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」（『仙台市史3』1950）
- ② 同上
- ③ 仙台市文化財調査報告書第3集「仙台市燕沢善応寺横穴群調査報告書」（1968）
- ④ 仙台市文化財調査報告書第8集「仙台市向山愛宕山横穴群調査報告書」（1974）
- ⑤ 山中権「仙台市外大年寺山の横穴」（考古学雑誌1の2）
- ⑥ 註①
- ⑦ 地学団体研究会編「新版仙台の地学」（1974）
- ⑧ 註①
- ⑨ 宮城県文化財調査報告書第1集「遠見塚古墳」（1950）

- ⑩. 仙台市文化財調査報告書第5集「法領塚古墳」（1972）
- ⑪. 氏家和典「東北横穴の問題」（伊東信雄環暦記念論文集・1972）他
- ⑫. 註③、2号墳、（P4）
- ⑬. 福島県原町市羽山装飾横穴で類例が報告されている。（原町市教育委員会「羽山装飾横穴発掘調査概報」1974）
- ⑭. 註③、P31
- ⑮. 註③、図版33下
- ⑯. 鎌崎彰一「須恵器編年図表」（日本の考古学V、VI、1967）
- ⑰. 川語は、主として佐藤泰山編「日本の美術No.6 刀剣」（至文堂）による。
- ⑱. 坂の外向については稜、段、沈線の3種類の形態を包括する表現として便宜的に「屈曲」という言葉を使用した。又、内向については、栗曲式Ⅱ類の坂の内面の形態に類似することを意識して「曲折」という言葉を使用した。
- ⑲. 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」（『歴史14』1957）
- ⑳. 氏家和典「陸奥国分寺出土の丸底坂をめぐって」（『柏倉亮吉教授環暦記念論文集』1967）
- ㉑. 註⑯、
- ㉒. 阿部義平「東国の土師器と須恵器」（『帝塚山考古学』No.1、1968）
- ㉓. 桑原滋郎「ロクロ土師器坂について」（『歴史38』）
- ㉔. 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代不形土器の変遷」（『研究紀要II』宮城県多賀城跡調査研究所、1975）
- ㉕. 日本考古学協会第50回大会発表要旨、第15回東北史学会発表要旨
- ㉖. 註㉔
- ㉗. 善應寺横穴2号墳の他、岩切入牛沢横穴群で1基確認されている。
- ㉘. 亘理町史編纂委員会「竹の花横穴発掘調査報告書」（1973）
- ㉙. 渡辺一雄「横穴墓の地域性－東北－」（考古学ジャーナル6、No.100、特集「横穴墓研究の現状」1975）
- ㉚. このような指摘は、追田郡涌谷町中野横穴群C地区1号、21号墳などの調査の折りにもなされている。涌谷町教育委員会「追戸、中野横穴群」（1973）
- ㉛. 氏家和典「辺境における横穴古墳群の諸問題」（日本考古学の諸問題・1964）
- ㉜. いわき市史編纂委員会編「中田装飾横穴」（いわき市史別巻・1971）
- ㉝. 仙台市中田第一土地区画整理組合「仙台市中田町安久遺跡発掘調査報告」（1975）  
なお、この古墳の横穴式石室は区画整理街路で破壊される運命にあったが、1976年1月に安久東地区区画整理公園予定地に移築・復原された。
- ㉞. 氏家和典「群集墳と横穴古墳」（古代の日本8－東北－、1970）



# 写 真 図 版



写真1 宗澤寺横穴群周辺航空写真 その1 (○印 宗澤寺横穴群)  
(昭和46年10月21日撮影 調査前 縮尺 = 1 : 12,500)



写真2 宗澤寺横穴群周辺の航空写真 その2 (○印 宗澤寺横穴群)

(昭和51年12月撮影=調査後 緯尺 = 1 : 6,000)

写真3

調査前写真  
(南方から撮影)



写真4

横穴群遠景  
(東南方向より撮影)



写真5 宗澤寺横穴群全景 (前方より撮影) ※左より順に1, 2, 3, 4……13, 14号窟。  
7, 10号窓は耕土の堆で見えない)



写真6 発掘作業状況



写真7 1号坑玄室

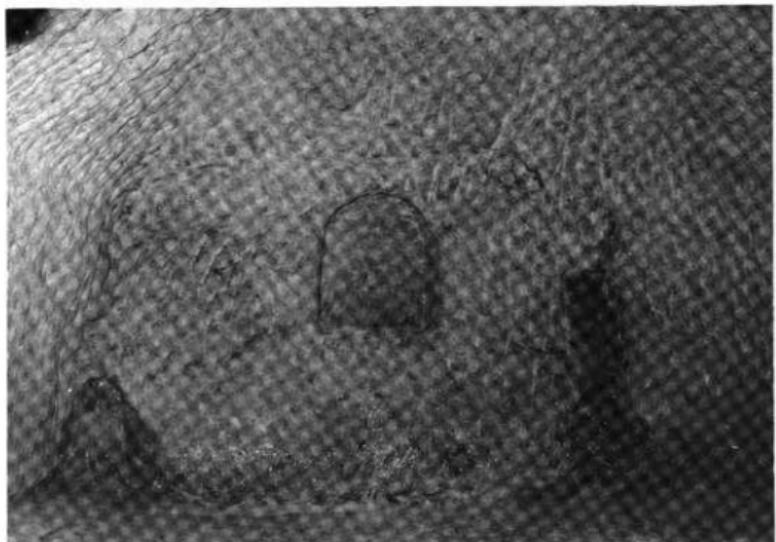




写真9 3号洞全貌



写真10 2号洞全貌



(上) 写真10  
3号墳玄室奥壁の状況  
(左) 写真11  
3号墳玄室左側壁の工具痕





写真13 4号墳全貌



写真12 4号墳埋積土断面

写真14  
（4号埴玄空）



写真15  
右側壁

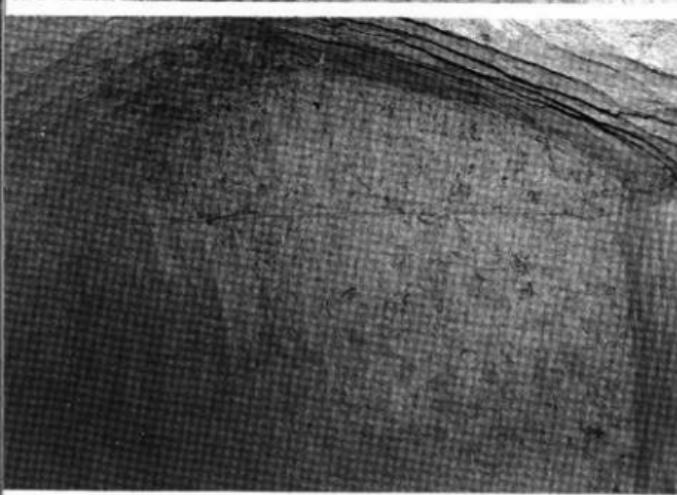


写真16  
左側壁工具痕

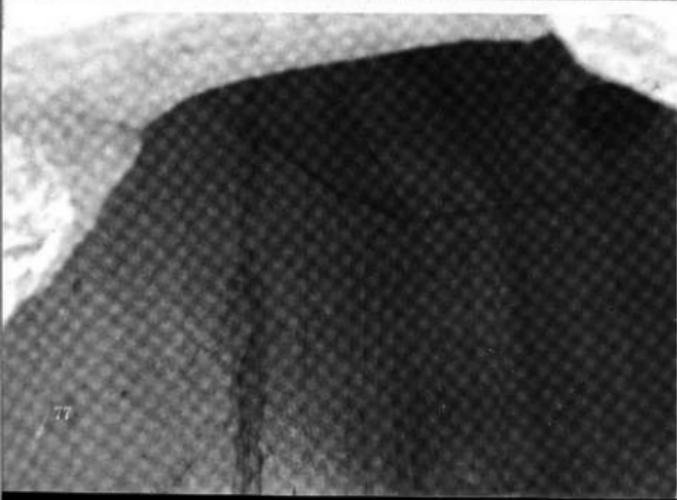


写真17  
（5号墳）閉塞石の状況



写真18  
玄室遺物出土状況



写真19 玄室発見の人骨（頭骨）

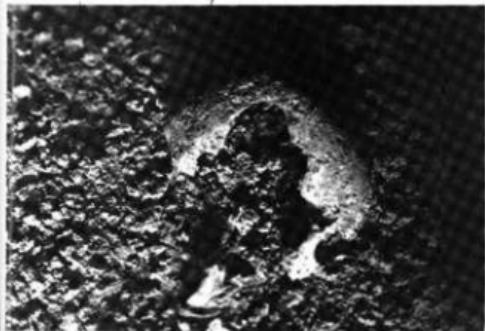


写真20 義道遺物出土状況

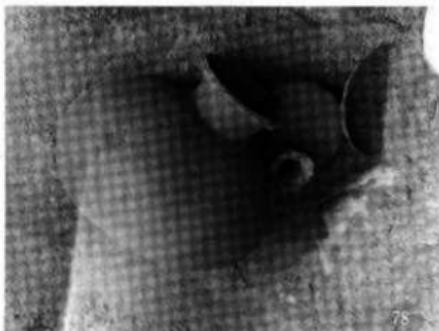


写真21  
5号墳正面全景



写真22  
5号墳玄室

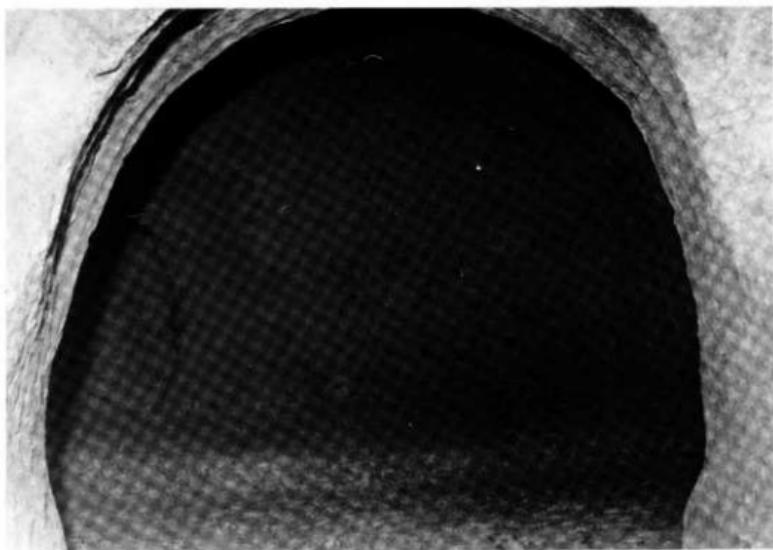


写真 23  
6号墳正面全景

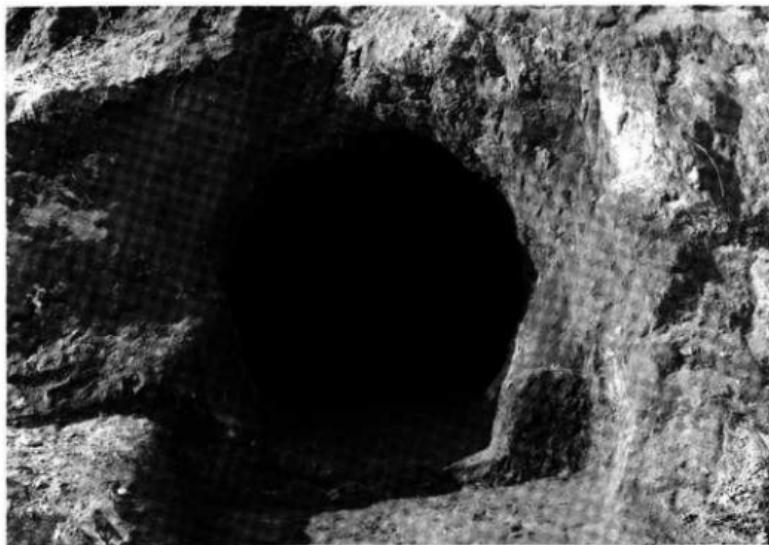


写真 24  
7号墳正面全景  
(手前石室)



写真25  
△7号墳△玄門部

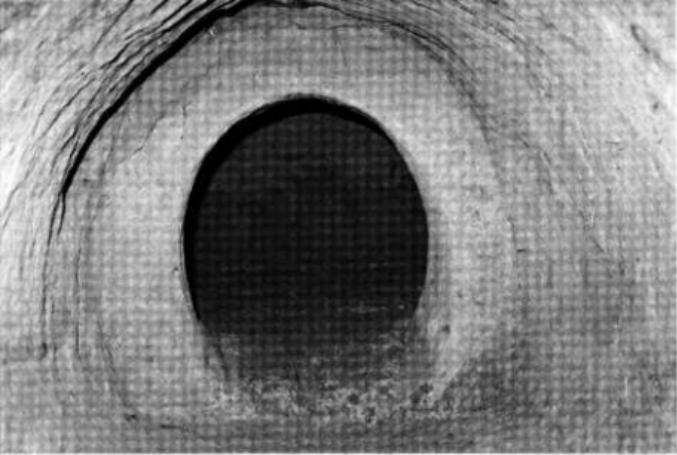


写真26  
玄室床面

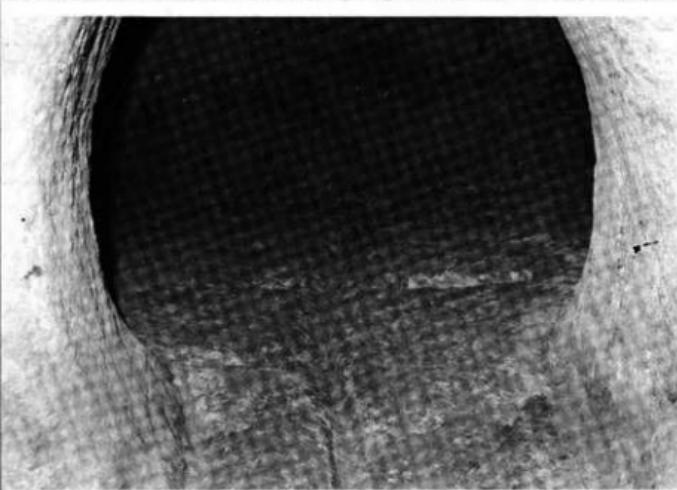


写真27  
玄室奥壁

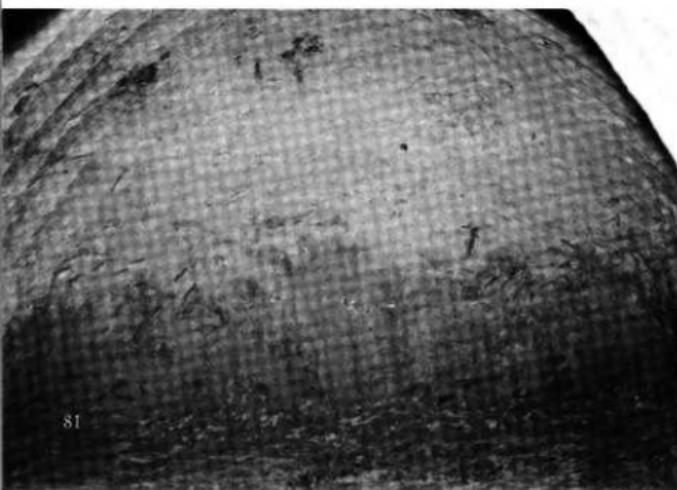


写真28 8号墳正面全景

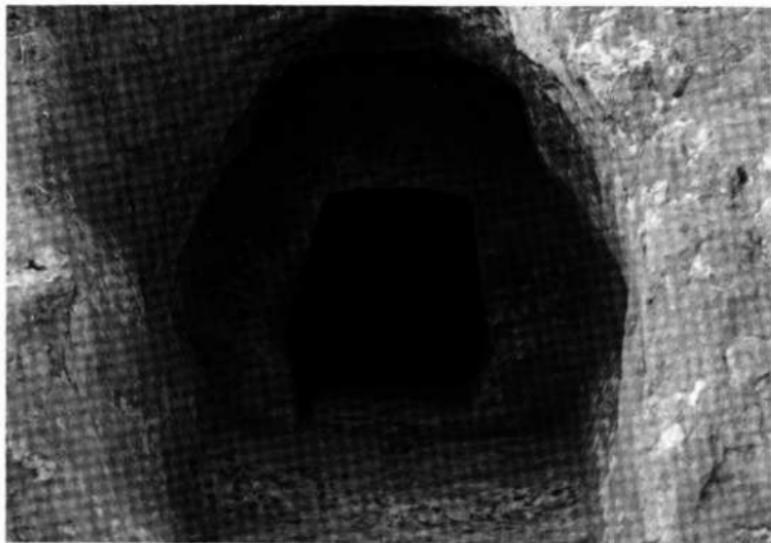


写真29 8号墳玄門部



写真30  
「8号墳玄室」右側壁上半



写真31  
天井部工具痕

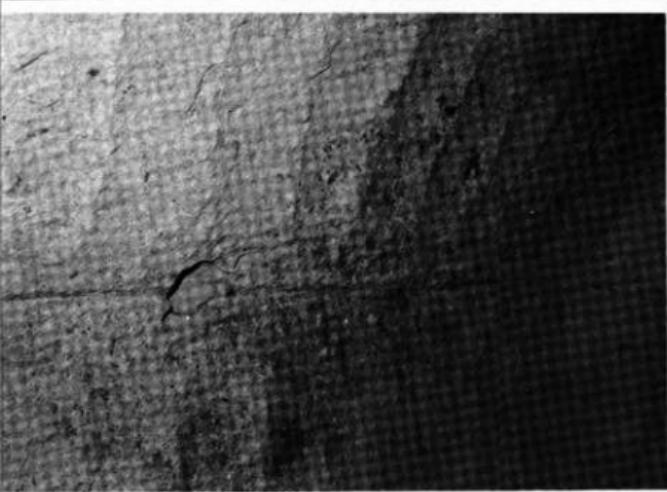


写真32  
前壁

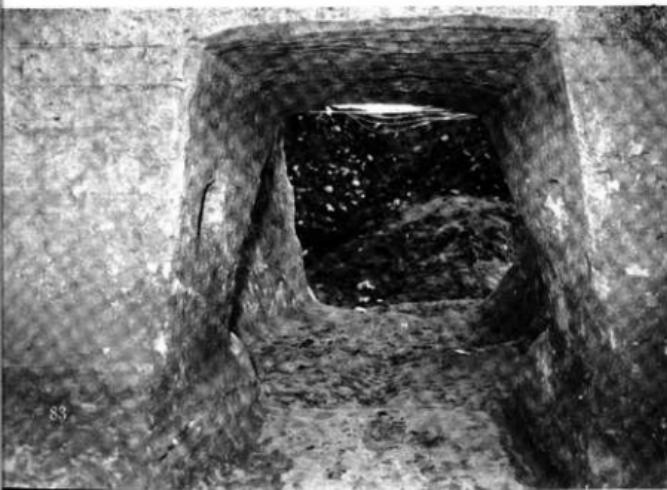


写真33 〈9号墳〉玄門閉塞石



写真34 玄室人骨出土状況



写真35 〈10号墳〉正面全景



写真36 〔12号墳〕正面埋積状況  
左(11号墳)



写真37 〔11号墳〕正面全景



写真38 〔12号墳〕正面全景

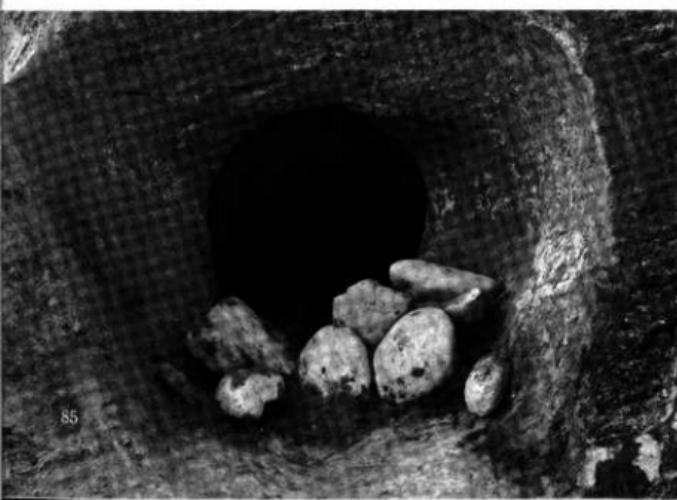


写真39  
^13号墳^全景

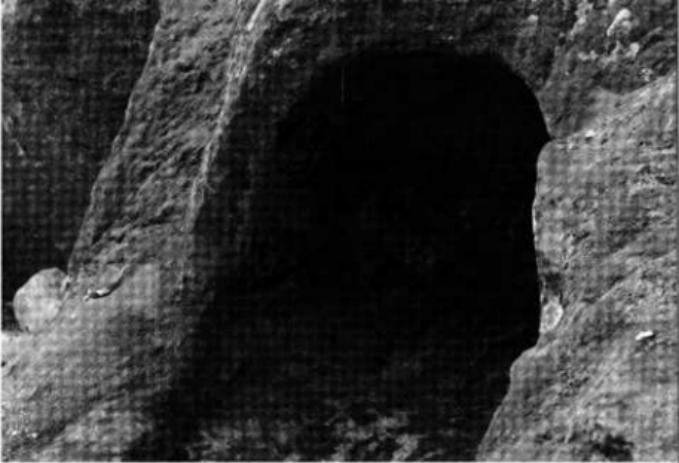


写真40  
^14号墳^正面全景



写真41  
^14号墳^提板出土状況





写真42 出土遺物 (I)

須恵器

- 1~4 長頸瓶  
(1, 2: 5号墳玄室出土)  
(3: 8号墳鏡道出土)  
(4: 4号墳鏡道出土)  
5. 橫 瓶  
(5号墳鏡道出土)



1



2



3



4



5



6



7



8

写真43 出土遺物 (2)

- 1 : 須恵器 (瓶底) = 14号墳表道出土  
3 : 土師器環 = 4号墳表道出土  
5 : 土師器環 = 5号墳表道出土  
7 : 土師器環 = 5号墳前庭出土

- 2 : 須恵器 (平瓶) = 5号墳表道出土  
4 : 土師器環 = 7号墳前庭出土  
6 : 土師器環 = 7号墳前庭出土  
8 : 刀 子 = 5号墳玄室出土

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物星原セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善應寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡晚奥山分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法輪塔古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳兎頭調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）

---

### 仙台市文化財調査報告書第9集

#### 宗禪寺横穴群発掘調査報告書

昭和51年3月発行

発行 仙台市教育委員会

仙台市西区則町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL.(25)6466(代)

---



東洋電機製造